都城市文化財調査報告書第47集

肱　穴　遺　跡

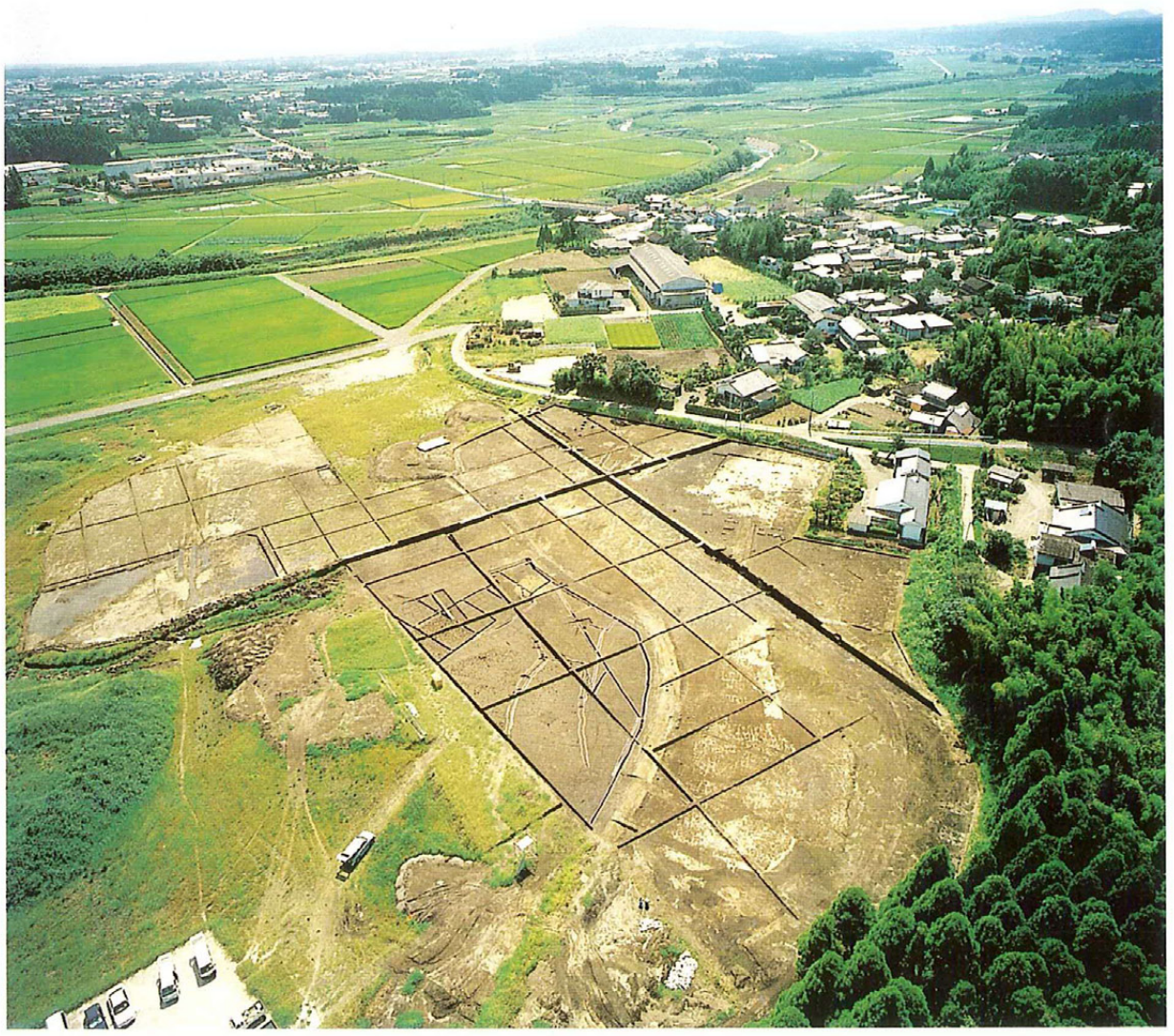
－県営担い手育成基盤整備事業横市地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－

１９９９年3月

宮崎県都城市教育委員会

肱　穴　遺　跡

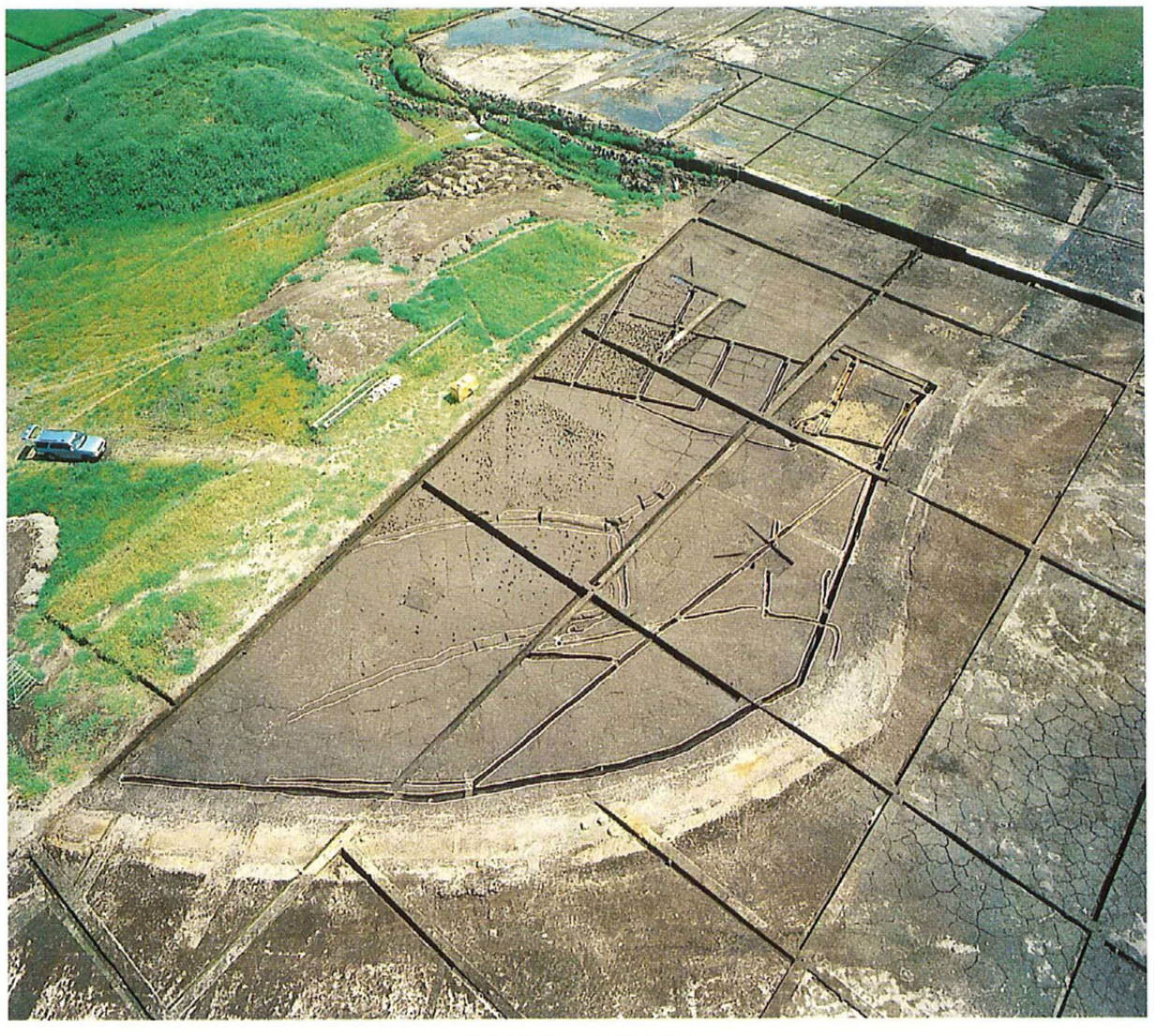
－県営担い手育成基盤整備事業横市地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－



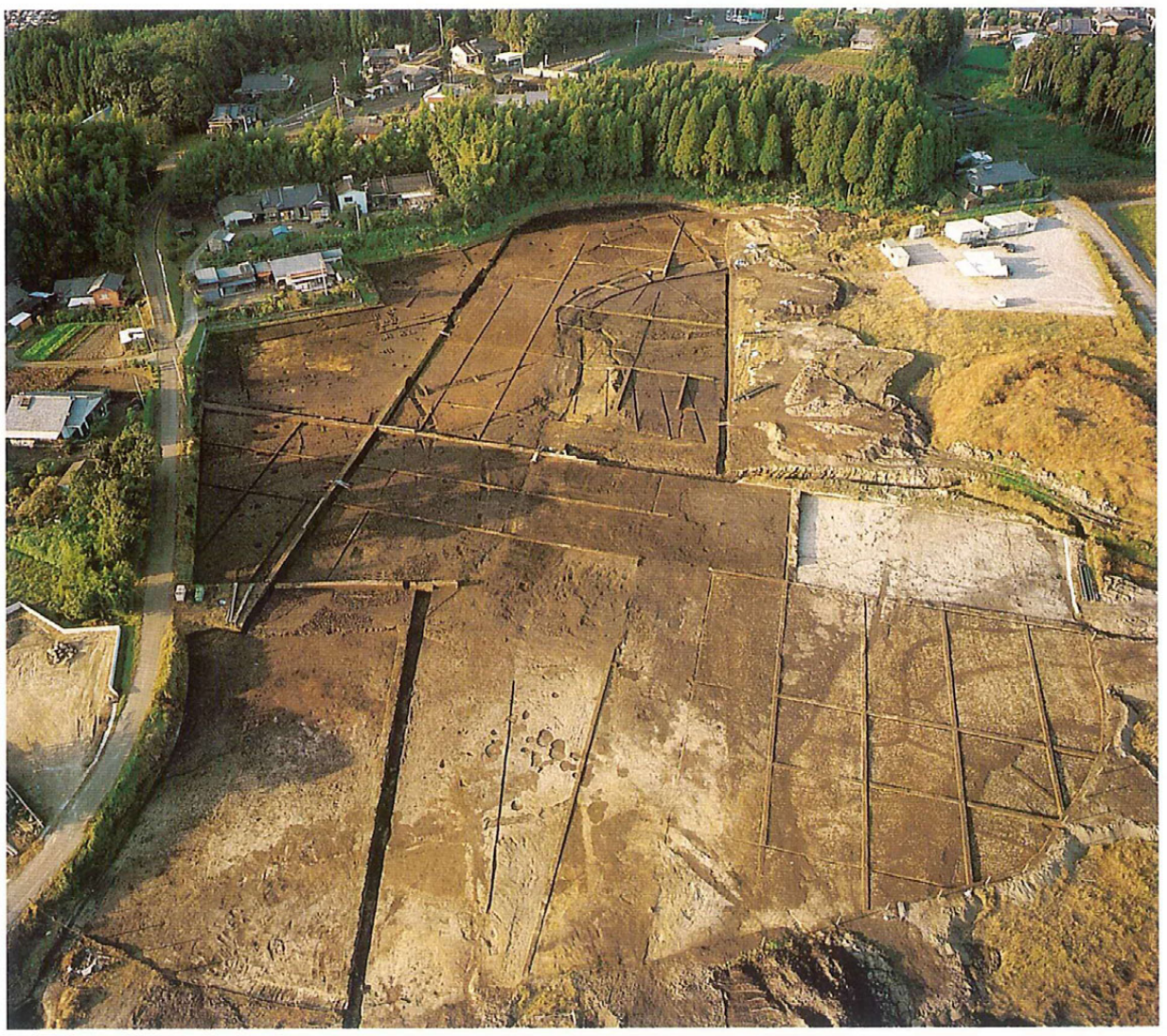
（肱穴遺跡遠景・近世水田面検出時）

1999年3月

宮崎県都城市教育委員会



近世水田面遠景



中世遺構群遠景

縄文晩期～古代遺構群遠景

住居址柱穴内出土遺物（縄文晩期終末期～弥生前期）

序　文

本書は、「県営担い手育成基盤整備事業横市地区」に伴い、受託事業として都城市教育委員会が調査を実施した、肱穴遺跡の発掘調査概要報告書であります。

当遺跡の所在する都城市横市町では、県営ほ場整備事業に先立つ埋蔵文化財の発掘調査が平成８年度から継続的に実施されており、これまでにも古墳時代の集落や中世水田址など、数々の成果が報告されております。平成10年４月から同年12月にかけて実施した今回の調査でも、縄文・弥生・古代・中世・近世の遺構・遺物が多数出土しておりますが、中でも縄文時代の終りから近・現代まで断続的に認められる水田址の発見は、当地における水田開発史を知る上で大変貴重な資料となりました。

本書の刊行を通して、こうした地域の文化財に対する理解と認識がますます深まっていくことを願うとともに、今回の成果が学術研究の発展に少しでも寄与できれば幸いです。

最後に、例年にない酷暑の中で発掘作業に従事していただいた市民の皆様をはじめ、関係各機関の方々には多大なご理解・ご協力をいただきました。また、現場における発掘調査から出土遺物の整理についても、多くの先生方のご指導・ご教示を拝しました。ここに記し、心から感謝の意を表します。

1999年３月

都城市教育委員会

教育長　隈　元　幸　美

例　言

1．本書は「県営担い手育成基盤整備事業横市地区」に伴い、都城市教育委員会が平成10年４月22日から平成10年12月15日まで調査を実施した肱穴（ひじあな）遺跡の発掘調査概要報告書である。

2．発掘調査地は宮崎県都城市横市町122-1番ほか（字肱穴）であり、調査面積は15,000㎡である。

3．調査の組織は以下のとおりである。

［調査委託］	宮崎県	知事	松形祐堯
［調査受託］	都城市	市長	岩橋辰也
［調査主体］	都城市教育委員会	教育長	隈元幸美
［調査総括］	都城市教育委員会	文化課長	遠矢昭夫
		文化課長補佐	綿田秋嗣
		文化課文化財係長	中村久司
［調査庶務］		文化課文化財係主査	矢部喜多夫
		文化課臨時職員	漆島賢子
［調査担当］		文化課文化財係主事	横山哲英
		文化課文化財係嘱託	濱田教靖（平成10年4月1日～平成10年9月30日）
［調査補助員］		文化課文化財係嘱託	大盛祐子

4．現場における遺構の実測は、作業員の協力を得て横山・濱田・大盛が行い、都城市文化課矢部喜多夫主査・同染畑光博主事・同米澤英昭主事・宮崎県埋蔵文化財センター嘱託下田代清海氏らの助力を得た。
また、実測の一部は、宮崎県文化財調査・サポート協同組合、㈱日測、㈱マエダに委託し、遺構分布図の作成及び出土遺物の取り上げには、テクノ・システム㈱の遺跡調査システム“ＳＩＴＥ”を用いた。

5．本書に掲載した遺構分布図の製図は、横山があたった。

6．本書で使用した基準方位は磁北であり、レベルは海抜絶対高である。

7．出土遺構及び本書に掲載した遺物の写真撮影は横山が行い、遺構の空撮については㈱日測、㈱マエダに委託した。

8．本書の執筆及び編集は、大盛の協力を得て横山が行った。

9．現場の調査については、宮崎大学教育学部柳沢一男教授のご指導を賜った。また、出土遺物については、太宰府市教育委員会文化財課山本信夫氏の鑑定・ご教示を賜った。

10．自然科学分析については、㈱古環境研究所に委託した。

11．本遺跡におけるすべての記録（写真・図面等）及び出土遺物は、都城市立図書館内の埋蔵文化財整理収蔵室にて保存・管理されている。

目　　次

中扉口絵　肱穴遺跡遠景［北東上空から］
巻頭口絵　1．近世水田面遠景［北西上空から］　中世遺構群遠景［南側上空から］
　　2．縄文晩期～古代遺構群遠景［南西上空から］　住居址柱穴内出土遺物［縄文晩期終末期～弥生前期］

Ⅰ．はじめに ……1
　1．調査に至る経緯 ……1
　2．遺跡の位置と環境 ……3
Ⅱ．調査の記録 ……5
　1．調査の経過と概要 ……5
　2．遺跡の層序 ……5
　3．遺構と遺物 ……7
　　1）縄文時代晩期終末期～弥生時代後期・終末期 ……7
　　2）古　　代 ……11
　　3）中　　世 ……14
　　4）近 世～近 代 ……17

挿　図　目　次

図1　遺跡位置図 ……1
図2　遺跡周辺地形図 ……2
図3　肱穴遺跡基本土層図 ……5
図4　肱穴遺跡遺構分布図①（縄文時代晩期終末期～古代）……6
図5　肱穴遺跡遺構分布図②（中世水田分布図）……13
図6　肱穴遺跡遺構分布図③（近世～近代）……18

図　版　目　次

写真1　田谷・尻枝遺跡［南東上空から］
写真2　加治屋遺跡［真上から］ ……3
写真3　鶴喰遺跡遠景［東側上空から］
写真4　中尾山・馬渡遺跡全景［真上から］ …4
写真5　縄文時代晩期終末期～古代遺構群［真上から］ ……7
写真6　縄文晩期～弥生前期住居址検出状況［南西から］
写真7　縄文晩期～弥生前期住居址群完掘状況①［真上から］
写真8　縄文晩期～弥生前期住居址群完掘状況②［北側から］
写真9　縄文晩期～弥生前期住居址①［東側から］
写真10　縄文晩期～弥生前期住居址②［東側から］
写真11　石包丁・土掘具出土状況［南側から］
写真12　石包丁出土状況接写［北側から］ ……8

写真13　縄文晩期水田層確認トレンチ［南東側から］　写真14　縄文晩期水田層接写［東側から］
写真15　弥生後期～終末期溝状遺構（東半部）検出状況［西側から］　写真16　弥生後期～終末期溝状遺構（東半部）完掘状況①［真上から］
写真17　弥生後期～終末期溝状遺構（東半部）完掘状況②［西側から］　写真18　弥生後期～終末期木組状遺構検出状況①［北側から］
写真19　弥生後期～終末期木組状遺構検出状況②［西側から］……9
写真20　弥生後期～終末期木組状遺構検出状況③［東側から］　写真21　弥生後期～終末期木組状遺構検出状況④［北側から］
写真22　溝状遺構内（東半部）遺物出土状況①［東側から］　写真23　溝状遺構内（東半部）遺物出土状況②［北側から］
写真24　弥生後期～終末期溝状遺構（西半部）検出状況［東側から］　写真25　弥生後期～終末期溝状遺構（西半部）完掘状況［西側から］
写真26　溝状遺構（西半部）内木製品出土状況［北東側から］……10
写真27　出土遺物（縄文晩期～弥生後期・終末期）①　写真28　出土遺物（縄文晩期～弥生後期・終末期）②
写真29　出土遺物（縄文晩期～弥生後期・終末期）③　写真30　出土遺物（縄文晩期～弥生後期・終末期）④
写真31　古代柱穴群完掘状況［真上から］……11
写真32　古代掘立柱建物跡検出状況［西側から］　写真33　古代柱根出土状況［東側から］
写真34　古代竪穴住居址群検出状況［北側から］　写真35　古代竪穴住居址群完掘状況［北側から］
写真36　出土遺物（古代）①　写真37　出土遺物（古代）②
写真38　出土遺物（古代）③　写真39　出土遺物（古代）④……12
写真40　古代末～中世初頭水田層［西側から］　写真41　古代末～中世初頭水田面上の足跡［真上から］
写真42　古代末～中世初頭水田面完掘状況［東側から］　写真43　第1面Cブロック北側中世水田面検出状況①［北側から］……14
写真44　第1面Cブロック北側中世水田面検出状況②［東側から］　写真45　第1面Cブロック北側中世水田面完掘状況①［東側から］
写真46　第1面Cブロック北側中世水田面完掘状況②［真上から］　写真47　第1面Cブロック北側中世水田面表面状況①（凹凸面)[北側から]
写真48　第1面Cブロック北側中世水田面表面状況②（足跡列)[西側から]　写真49　第1面Cブロック北側中世水田面表面状況③（畝状遺構）［北側から］
写真50　第１面Ｃブロック南側中世水田面表面状況（足跡列）［北側から］……15
写真51　第1面B～Dブロック中世水田面完掘状況［真上から］　写真52　第１面Ｂブロック中世畝状遺構検出状況［東側から］
写真53　第1面Bブロック中世畝状遺構完掘状況［東側から］　写真54　第１面Ｄブロック中世畝状遺構検出状況［東側から］
写真55　第１面Ｄブロック中世畝状遺構断面［東側から］　写真56　第２面Ａブロック中世水田面検出状況［南東側から］
写真57　第２面Ａブロック中世水田面完掘状況［北東側から］……16
写真58　第２面中世水田面完掘状況［真上から］　写真59　第３面南東部中世水田面検出状況①［真上から］
写真60　第３面南東部中世水田面検出状況②［南側から］　写真61　第３面南東部中世水田表面状況
写真62　出土遺物（中世）……17
写真63　第2面Aブロック近世水田面検出状況①［北東側から］　写真64　第2面Aブロック近世水田面検出状況②［北東側から］
写真65　第２面近世水田面完掘状況［真上から］　写真66　第2面Aブロック近世水田面完掘状況（畦畔及び足跡群）［真上から］
写真67　第2面Bブロック近世水田面完掘状況（足跡群及び水路）［真上から］　写真68　第2面Aブロック近世水田面上凹凸（人間と家畜の足跡）……19
写真69　第1面Aブロック近世遺構群検出状況［南西側から］　写真70　第1面Aブロック近世掘立柱建物跡完掘状況［北西側から］
写真71　第1面Aブロック近世柱穴内軽石礎石出土状況［真上から］　写真72　第１面Ｂブロック近世遺構群検出状況［南西側から］
写真73　第1面Bブロック近世遺構群完掘状況①［南西側から］　写真74　第１面Ｂブロック近世遺構群完掘状況②［北東側から］
写真75　第1面Bブロック近世柱穴内柱根出土状況［真上から］　写真76　第1面Bブロック近世井戸内遺物出土状況［真上から］……20
写真77　第1面Cブロック北側近世遺構群検出状況［北側から］　写真78　第1面Cブロック北側近世道路状遺構完掘状況［南西側から］
写真79　第1面Cブロック南側近世溝状遺構内遺物出土状況［北東側から］　写真80　第１面Ｄブロック近世溝状遺構完掘状況［北側から］
写真81　第2面Bブロック近代水路遺構内竹組検出状況［北側から］　写真82　出土遺物（近世）①
写真83　出土遺物（近世）②　写真84　出土遺物（近世）③……21

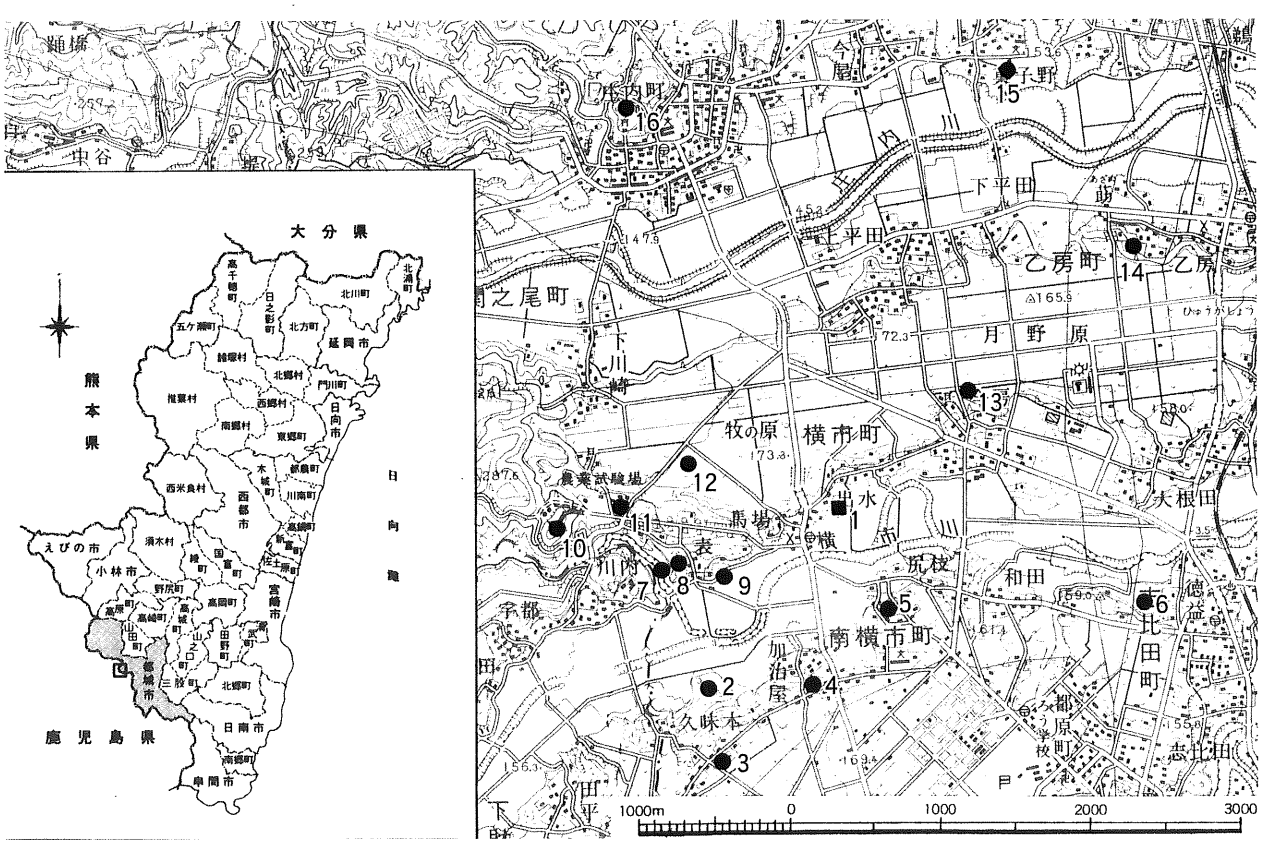
Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

宮崎県都城市横市地区では、平成５年度に県営ほ場整備事業（平成９年度より県営担い手育成基盤整備事業に移行）の実施が採択された。翌平成６年度、宮崎県北諸県農林振興局から文化財の所在の有無について照会を受けた宮崎県文化課が詳細な分布調査を実施したところ、事業対象区域（約170 ha）内において、10遺跡・約44haに及ぶ埋蔵文化財包蔵地（総称「横市地区遺跡」）の所在を確認した。その後、都城市教育委員会は県文化課が実施した試掘調査の結果を受けて北諸県農林振興局と協議を行い、平成８・９年度の鶴喰遺跡発掘調査を皮切りに、工事施工と並行する形で横市地区遺跡の発掘調査に着手した。

平成10年度も横市町・出水下地区において約13haのほ場整備が計画されたため、県文化課が平成９年６月に約６haの微高地部分を対象とする試掘調査を実施した。その結果、施工区西側の舌状丘陵縁辺部で古代から中世の土師器片が出土し、周辺の低地部分では文明軽石層（15世紀後半頃）下部からイネのプラントオパールが検出されたため、当該期の集落及び水田跡が残存していると推察された。これらを踏まえて、当市教育委員会と北諸県農林振興局の間で工事施工区域内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、現状保存が困難な約1.5 haを対象に記録保存の措置を講ずることとなった。

調査は、宮崎県の委託を受け、都城市教育委員会が主体となって実施した。現場での発掘作業は平成10年４月22日から平成10年12月15日にかけて行い、その後引き続き都城市埋蔵文化財整理収蔵室において出土遺物や図面等の整理作業を行った。



1.肱穴遺跡　2.中尾山・馬渡遺跡　3.池原遺跡　4.加治屋遺跡　5.田谷・尻枝遺跡　6.正坂原遺跡　7.畑田遺跡　8.新宮城跡　9.鶴喰遺跡　10.母智丘原第１遺跡　11.母智丘原第２遺跡　12.牧ノ原第２遺跡　13.月野原第２遺跡　14.大久保第２遺跡　15.菓子野地下式横穴墓群　16.安永城跡

図１　遺跡位置図

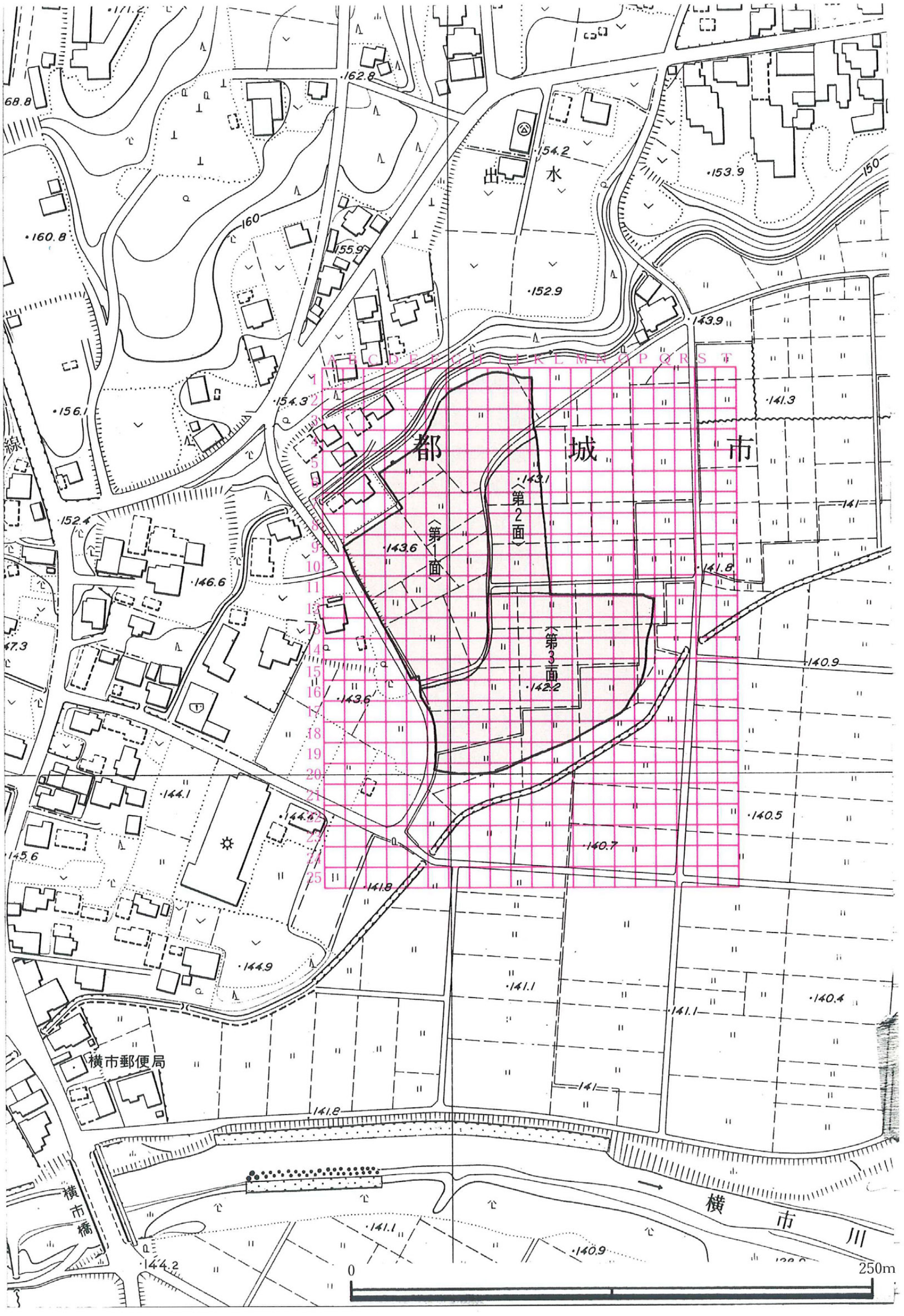


図２　遺跡周辺地形図

2．遺跡の位置と環境

肱穴（ひじあな）遺跡は宮崎県都城市横市（よこいち）町122-1 番ほか（字肱穴）に所在する。都城市は宮崎県の南西部に位置しており、市域は東を東岳、柳岳を主峰とする鰐塚山地、西を白鹿岳、瓶台山から霧島山系へと連なる山地に囲まれた、南北に細長い地溝状の盆地底のほぼ中央を占めている。当遺跡の所在する横市地区は、都城市街地の北西部に位置し、鹿児島県曾於郡財部町と県境を接している。地区の中央には白鹿岳の裾野に端を発する大淀川水系の横市川が東流しており、流域の低位面を挟んで、南北に成層シラス（二次シラス）台地である蓑原、月野原の両台地面が広がっている。

当遺跡は横市川左岸に位置しており、月野原台地の端部が南側の横市川へ向けて緩やかに傾斜する沖積世の低位段丘面上に立地している。遺跡の標高は海抜142 ～144 mで、河川流域の氾濫原面との比高差は２～４mほどである。当該地の現況はほぼ平坦な水田であるが、調査対象区域の北西角から南東方向へと、扇状に広がる旧地形の段差がわずかに残存している。［図２］「出水」の字名が示す通り、古来より月野原台地からの伏流水が湧出する地であったと推察され、今回の調査でも、湿田を乾田に改良する目的で近・現代に行われた盛土工事の痕跡が認められた。

当該地区の歴史的環境については、周辺で確認・調査されている遺跡から、縄文時代早期まで溯ることができる。まず、肱穴遺跡の対岸、蓑原台地北端の緩傾斜地に所在する田谷・尻枝遺跡［図１－５・写真１］では、散石状の礫群とともに縄文時代早期中葉頃の円筒形土器や磨石が出土し、さらにその下部層では陥し穴１基が検出されている。また、同遺跡では縄文時代中期頃の陥し穴も確認されている。後期の遺物は、横市川南岸の中位河岸段丘上に立地する正坂原遺跡［図１－６］で出土した凹線文・磨消縄文系の綾式や指宿式土器、貝殻文系の市来式土器、蓑原台地北縁に所在する加治屋遺跡（第２次調査）の［図１－５・写真２］の三万田式土器などがあり、月野原台地南部の牧ノ原第２遺跡［図１－12］では当該期の竪穴住居址も確認されている。晩期の遺物は少量ながらもかなり普遍的に認められるが、とくに蓑原台地北端の舌状部に立地している中尾山・馬渡遺跡［図１－２・写真４］の孔列文土器や、正坂原遺跡出土の黒川式土器、刻目突帯文土器などは肱穴遺跡との関連性も含めて興味深い。

写真１．田谷・尻枝遺跡遠景

当地区の弥生時代の遺跡は、瀬戸内系の凹線文土器が出土した牧ノ原第２遺跡や同じ台地の南端に所在する月野原第２遺跡［図１－13］、母智丘山頂部の母智丘原第１遺跡［図１－10］など、中期後半頃から散見され始める。後期以降では、２次に亘る調査で後期末の竪穴住居址や周溝状遺構、後期後半～終末期の竪穴住居址が検出された加治屋遺跡や当該期の遺物が出土した池原遺跡［図１－３］、月野原台地北端に立地し、同じ後期・終末期頃の遺構・遺物が出土した大久保第２遺跡［図１－14］などが所在しており、河川に面した台地端部に営まれた当該期集落の様相が明らかになりつつある。

写真２．加治屋遺跡遠景

古墳時代では、平成８・９年度の県営ほ場整備事業に伴って調査が実施された鶴喰遺跡［図１－９・写真３］の後期集落が特筆される。都城市域では初めてのカマドを伴う竪穴住居を含め68軒の住居址が検出されており、完形の馬鐸など豊富な遺物も注目されている。また、同時期とみられる竪穴住居址は月野原台地南部の母智丘原第２遺跡［図１－11］でも出土しているが、当地区一帯では弥生時代と同様に、古墳時代についても後期以前の遺跡が皆無であり、今後の事例増が待たれる。なお、大久保第２遺跡のほぼ対岸、東流する大淀川水系・庄内川左岸の河岸段丘上には、これまでに14～15基の墓が確認されている菓子野地下式横穴墓群［図１－15］が立地している。都城市内で確認されている３つの地下式横穴墓群の１つで、複数の人骨とともに貝輪や鉄剣・鉄鏃などが出土している。

写真３．鶴喰遺跡遠景

市の東部を西流する大淀川水系の沖水川流域から横市川流域にかけての地域には、古代末～中世初頭頃の遺跡が点在しており、隣接する旧大隅国から旧薩摩国へと繋がる古代のルートがこの地域に存在していた可能性も想定されている。古代の横市川流域を代表する遺跡としては、墨書土器や緑釉陶器、越州窯系青磁など平安期の遺物が多量に出土した中尾山・馬渡遺跡が挙げられる。遺構の面から公的施設や寺院等の可能性を示唆することはできないが、出土遺物の組成が一般集落とは異なる様相を示しており、他の遺跡とは一線を画している。なお、当地区一帯では鶴喰遺跡や牧ノ原第２遺跡、母智丘第１遺跡などでも当該期の遺物が出土している。

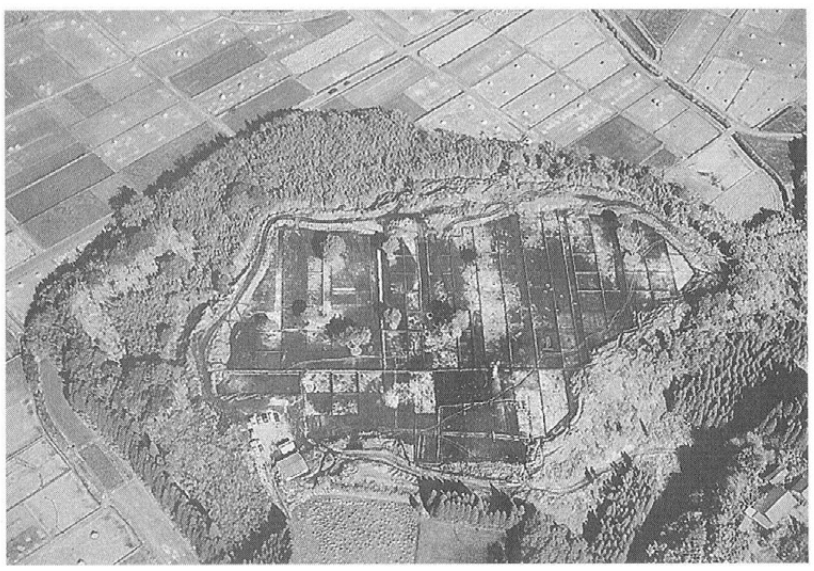


写真４．中尾山・馬渡遺跡遠景

中世については、集落跡やその生産基盤となる水田・畑跡、山城などが多く確認されている。横市川下流域の正坂原遺跡では、12世紀中後半を中心に15世紀後半（文明軽石降下前）頃まで永続的に営まれた集落が検出されている。棟軸の違いから数段階の変遷過程が追える掘立柱建物群や木棺土壙墓など、当時の集落構造を復元的に捉らえることができる遺構群や、文明軽石の降下で埋没した畝状遺構（畑跡）などが確認されている。大量の土師器・舶載磁器類とともに柱穴に礎石を伴う大型掘立柱建物や回廊状遺構が出土した鶴喰遺跡は、中世前半頃の居館址の可能性が高い。また、同遺跡においては宮崎県内では初めてとなる火山災害（文明軽石の降下）で被災した中世の水田跡が確認され、これまで不明であった当地域の近世以前の生産基盤の解明に一石を投じた。同種の類例は、横市川支流沿いの低地面に立地している畑田遺跡［図１－７］をはじめ周辺でも増加の傾向にある。鶴喰遺跡の北西部には、南北朝期の文献史料に初見がみられる新宮城跡［図１－８］が位置している。南九州域においてみられる、いわゆる「南九州館屋敷型」あるいは「群郭式」と呼ばれる城郭に比べるとかなり小規模で、村落領主の拠点である館城と呼ばれる範疇に含まれる山城である。なお、横市地区に隣接する庄内地区には、市内を代表する「南九州館屋敷型」城郭の１つであり、遠堀に囲まれた総構の範囲が30haを越える安永城［図１－16］が所在している。

Ⅱ．調査の記録

1．調査の経過と概要

今回の発掘調査は、ほ場整備による面工事で削平される範囲及び排水路・農道の敷設部分である約15,000m²を対象に実施した。発掘は、10m×10mを1単位とするグリッド法を用いて行い、対象区域に公共座標軸系のS・N基準線に一致したメッシュを設定した上で、南北方向を算用数字、東西方向をアルファベットで表記した。なお、調査の便宜上、現況の水田面の高低差にあわせて、調査区を第1面～第3面と呼称し、さらに第1面をA～D区、第2面をA・B区に細分した。[図2・6]

調査は、ほ場整備後に復する現水田耕作土の剝ぎ取りを事業者側が行った後、重機を用いて中世水田跡の出土が予想された第3層（桜島文明降下軽石層）上面までの掘り下げに着手した。しかし、中世水田の覆土である第3層が、旧地形の起伏や近世以降の耕作に伴う攪乱によってかなり乱れており、加えて掘り下げの段階で、試掘調査では確認されていない近世の遺構・遺物が多量に出土したため、第2b層以下について、急遽人力で発掘を進めることとした。その結果、第1・2面を中心に、第2b層中位面で近世～近代の遺物を伴う溝状遺構・掘立柱建物跡・水田跡等を、第3層及び第4a層上面で中世の畝状遺構・水田跡を確認することができた。また、調査の過程で、東西・南北方向に設定した土層観察用トレンチ内から古代の遺物が出土したため、中世遺構群の調査後、重機と人力を併用して下位の第4e層まで掘り下げたところ、第1面A・C区北側の第4e層・第7層上面において古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡を、さらに第1面D区及びC区の南側で縄文晩期終末期～弥生前期頃の住居跡や弥生後期・終末期の溝状遺構等を確認することができた。現場の作業は、平成10年4月22日から12月15日まで行い、その後、遺物の整理と概要報告書の作成を行った。なお、平成10年12月5日に市民を対象とした現地説明会を実施した。

2．遺跡の層序

本遺跡の層序は、基本的に地点ごとで異なった様相を呈している。とくに、調査の指標となる2枚のテフラ層（第3層：15世紀後半頃に噴出した桜島文明軽石層と第7層：約4,200年前の霧島御池軽石層）に挟まれた第4・6層は、旧地形の起伏（調査区南西→北東方向への谷地形）などによって地区ごとの土層堆積状況が大きく変化しているため、これを14層に細分し、現耕作土から霧島御池軽石層までをおおむね21枚に分層した。

なお、各時期の遺構検出面は、近世：第2b層、中世：第3・第4a層、古代：第4e・第7層、弥生後期・終末期：第4e層、縄文晩期～弥生前期：第7層であるが、地区ごとの詳細については、本報告で改めて行うこととしたい。

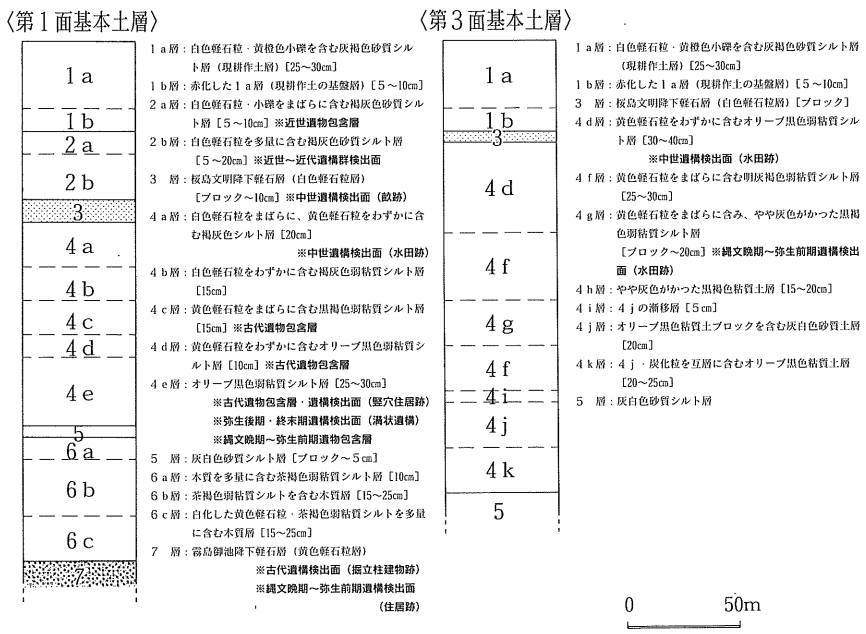


図3　肱穴遺跡基本土層図

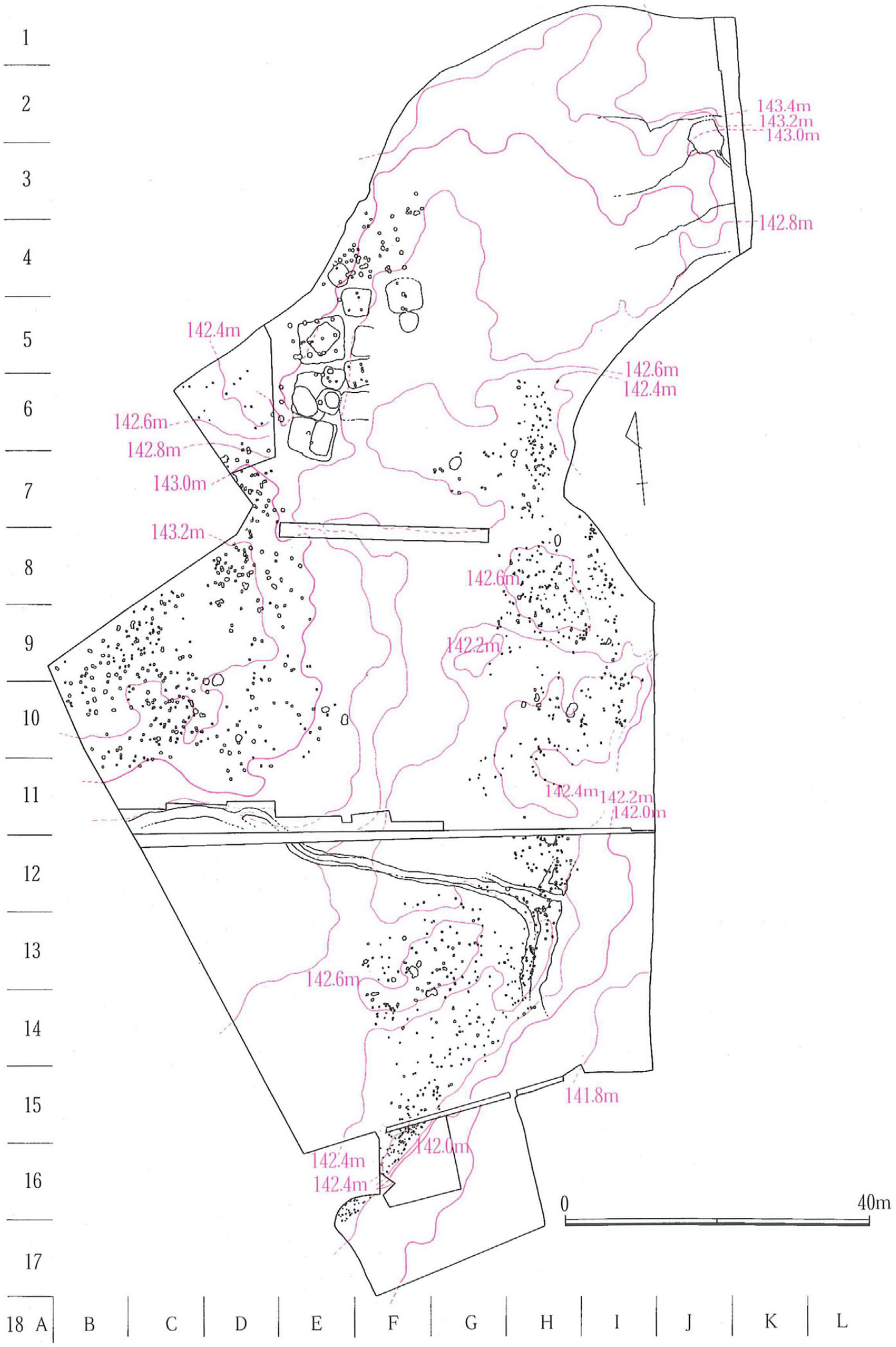


図４　肱穴遺跡遺構分布図①（縄文時代晩期終末期～古代）

3．遺構と遺物

今回の調査で確認した遺構・遺物は、大きく４時期に大別することができる。まず、縄文晩期終末期～弥生後期・終末期の段階では、擦り切り孔を有する石包丁や打製土掘具が出土した円形住居跡、刻目突帯文土器を伴う水田層（縄文晩期終末期~弥生前期）と、水田の用・排水路と推測される溝状遺構や木組状遺構（弥生後期・終末期）が挙げられる。調査区北側に集中する古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡については、共伴する土師器・須恵器から、８世紀後半～９世紀前半頃をピークに８世紀から10世紀までの年代幅が想定され、遺構の性格についても、竪穴住居群と総柱建物や庇付建物を含む掘立柱建物群という異なる２つの様相が看取できる。古代末から中世にかけての時期は、砂礫層にパックされた水田跡（古代末~中世初頭頃）、文明軽石降下前後の畝状遺構（畑跡）、今回の調査区のほぼ全域に広がる文明軽石層に覆われた水田面（中世後半）など、生産遺跡としての性格が強い。とくに第３面北東部で検出した文明軽石直下の水田面においては、良好な状態で大・小区画畦畔が確認されており、地形と合致した当該期水田の広がりを把握することができた。近世も後半に入ると、中世段階に開発された水田を廃して、調査区北・西部（第１面）一帯に再び集落域が形成される。掘立柱建物・井戸・土坑のセットを一つの単位とする当該期の遺構群は、溝状遺構に規制されて３つの区画に分かれており、18世紀後半～19世紀代の陶磁器類や木製品、墨書の認められる軽石製五輪塔などが共伴している。以下、時代ごとに順をおって概要を記した。

１）縄文時代晩期終末期～弥生時代後期・終末期［図４・写真５～30］

霧島御池軽石層上面で確認すると、当遺跡は北西から南東方向へ馬の背状の旧地形を呈しており、谷を挟んで弧状に延びる微高地の南半部に当該期の遺構・遺物は集中している。縄文晩期終末期～弥生前期の遺構は、直径４～５ｍの円形プランで、中央に２個の主柱穴を配し、周壁ライン上に８～10個の柱穴が並ぶ住居跡を確認している。後世の削平・攪乱を受けているため、竪穴・平地の別は不明であり、中央土坑も確認されていないが、いわゆる松菊里型住居である可能性が残る。なお、このタイプの住居に伴う柱穴からは、刻目突帯文土器や擦り切り孔を有する石包丁、打製土掘具等が出土している。また、これらの住居が点在する微高地周囲の低地面では、刻目突帯文土器を伴い、イネのプラントオパールを多量に含む水田該当層が確認されているが、これも攪乱を受けており、面的に把握するまでには至っていない。

弥生後期・終末期の遺構としては、前期集落の立地する微高地を横切って東西方向に延びる溝状遺構と、微高地から低湿地面への落ち際付近で溝とほぼ直交する形で出土した木組状遺構がある。先端部を削り、中ほどに抉りを施した木杭のまとまりである木組状遺構の機能については、当該期水田の用排水路とみられる溝状遺構に設けられた井堰や木橋等が想定される。なお、木杭とともに短頸壺が埋置されたような状態で出土しており、水口祭祀が行われていた可能性が示唆できる。

写真５．縄文時代晩期終末期～古代遺構群

写真７．縄文晩期～弥生前期住居址群完掘状況①

写真６．縄文晩期～弥生前期住居址検出状況

写真８．縄文晩期～弥生前期住居址群完掘状況②

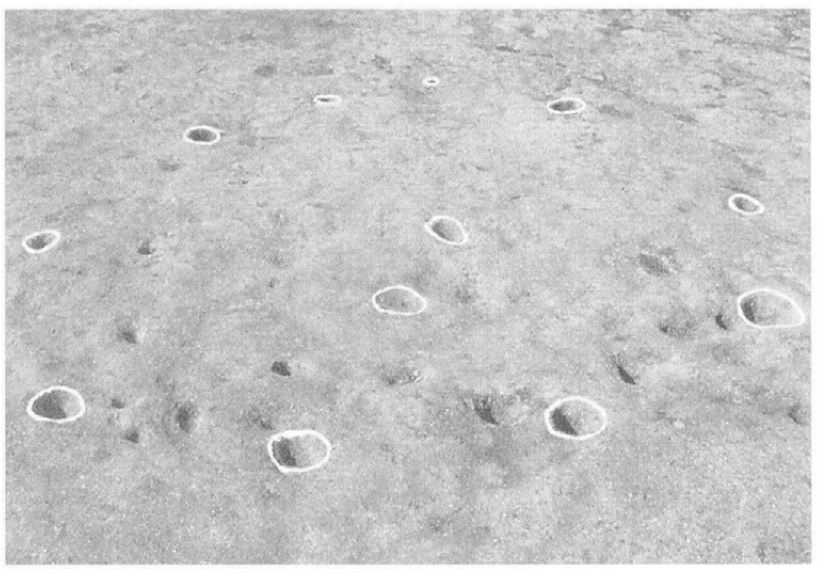


写真９．縄文晩期～弥生前期住居址①

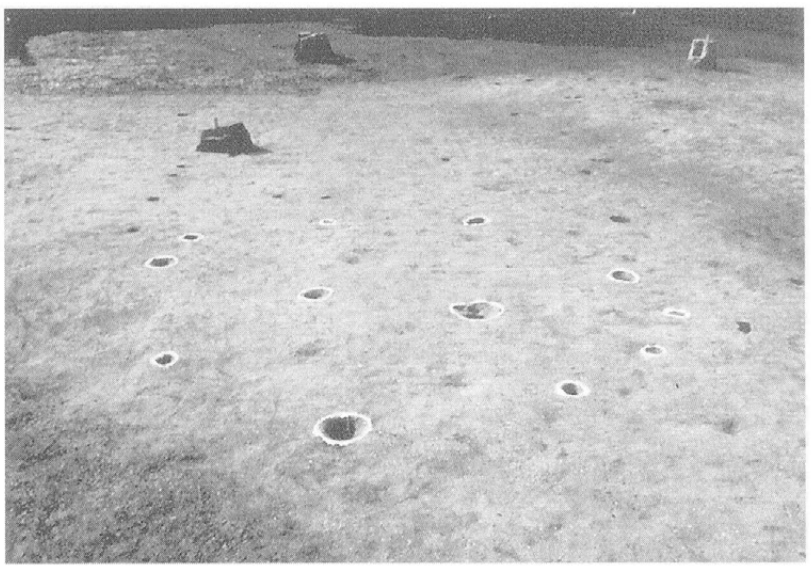


写真10．縄文晩期～弥生前期住居址②

写真11．石包丁・土掘具出土状況

写真12．石包丁出土状況接写

写真13. 縄文晩期水田層確認トレンチ

写真14. 縄文晩期水田層接写

写真15. 弥生後期～終末期溝状遺構（東半部）検出状況

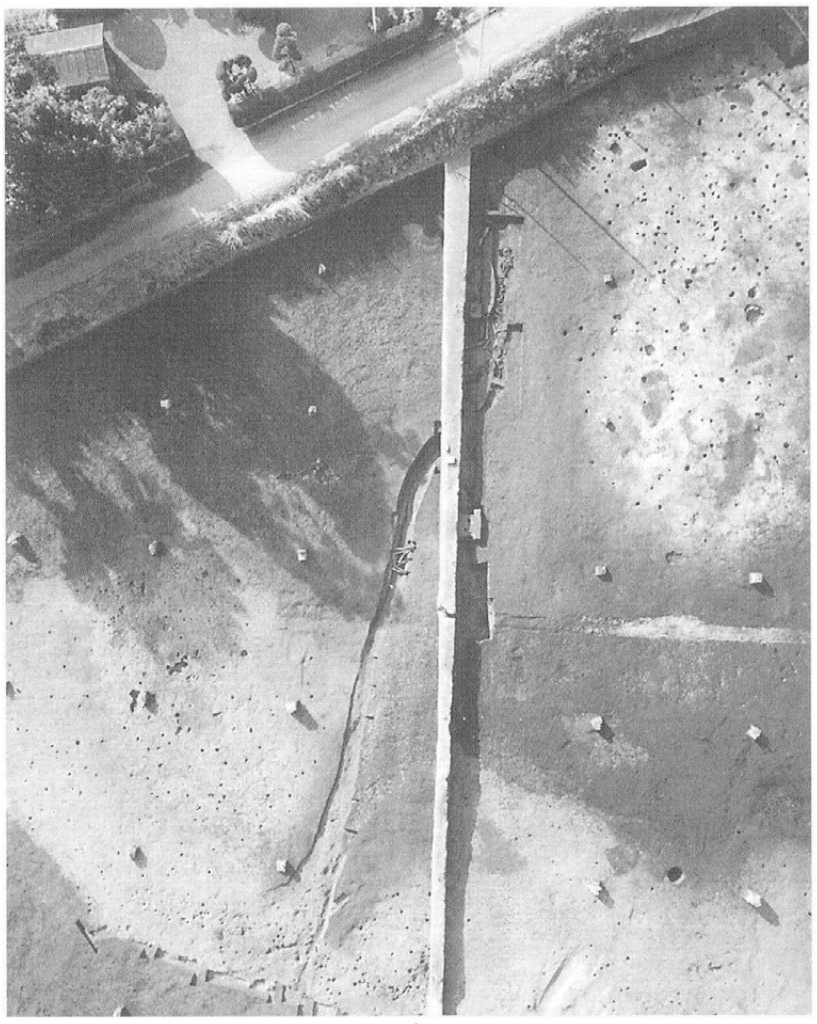


写真16. 弥生後期～終末期溝状遺構（東半部）完掘状況①

写真17. 弥生後期～終末期溝状遺構（東半部）完掘状況②

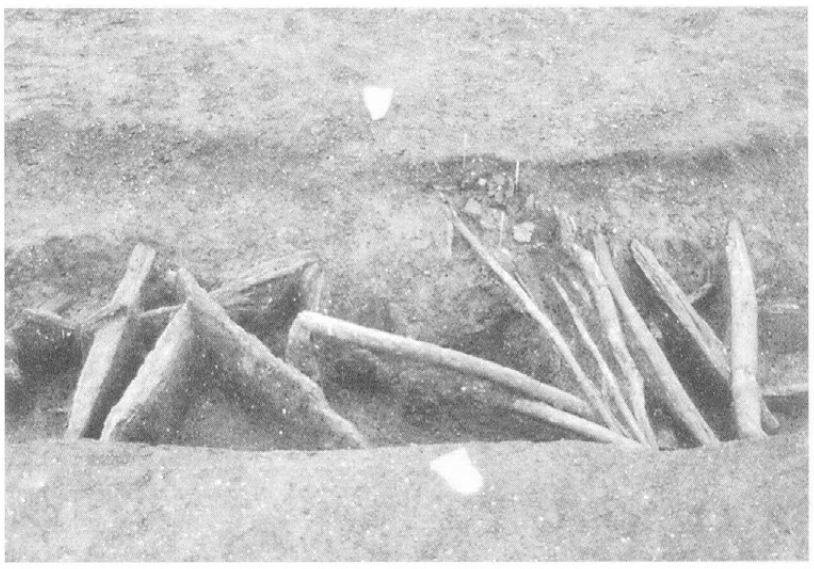


写真18. 弥生後期～終末期木組状遺構検出状況①

写真19. 弥生後期～終末期木組状遺構検出状況②

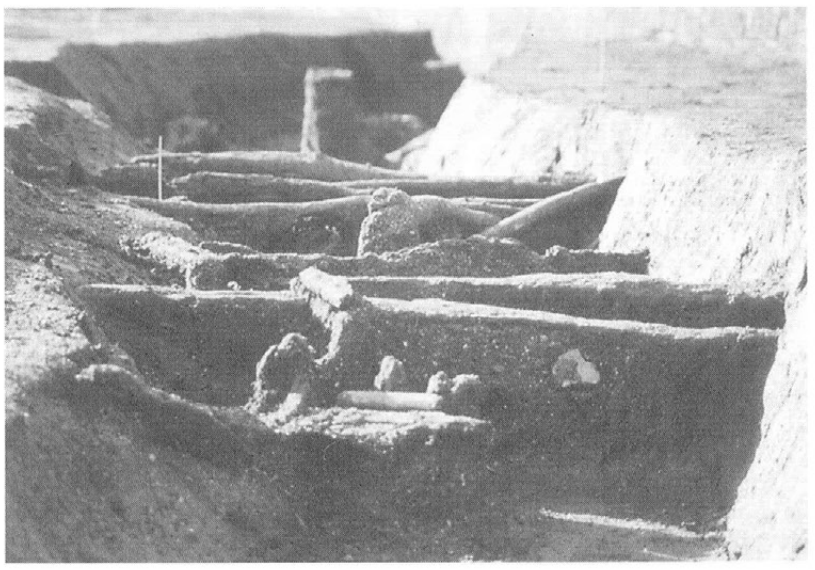


写真20．弥生後期～終末期木組状遺構検出状況③

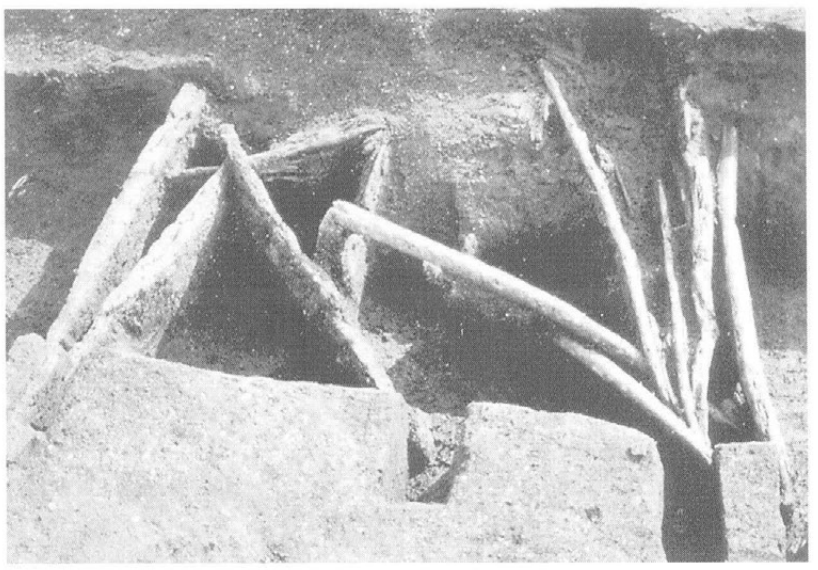


写真21．弥生後期～終末期木組状遺構検出状況④

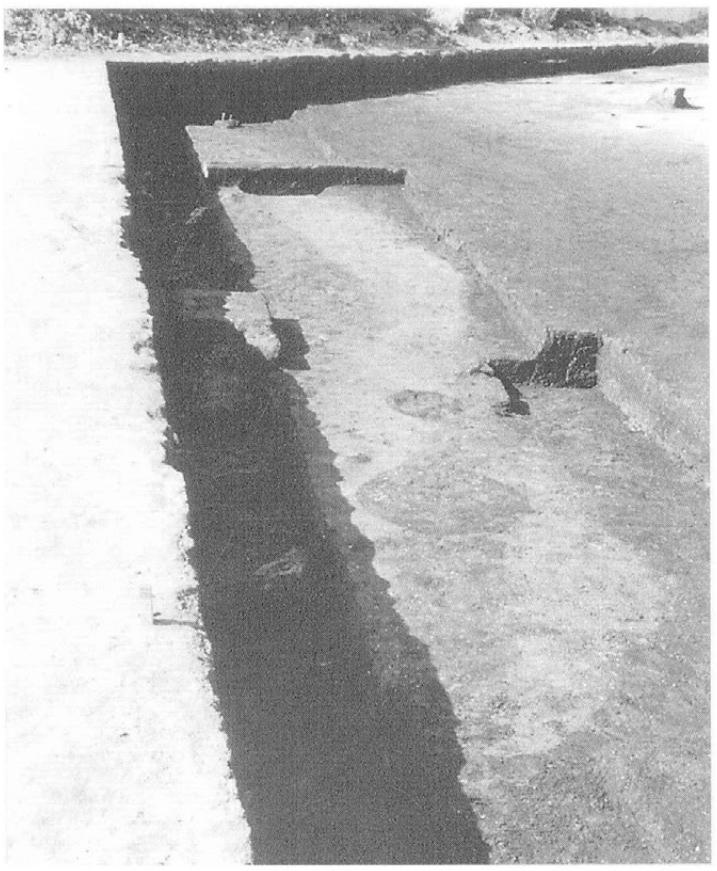


写真24．弥生後期～終末期溝状遺構（西半部）検出状況

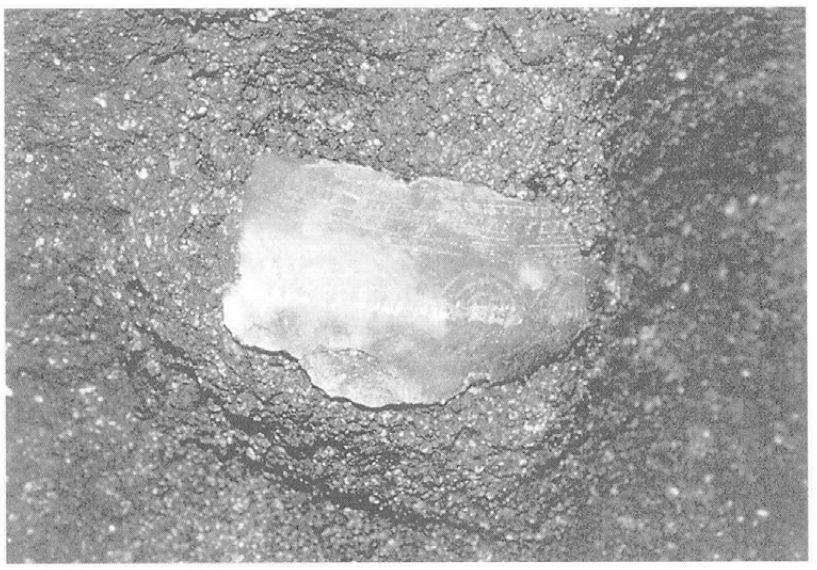


写真22．溝状遺構内（東半部）遺物出土状況①

写真23．溝状遺構内（東半部）遺物出土状況②

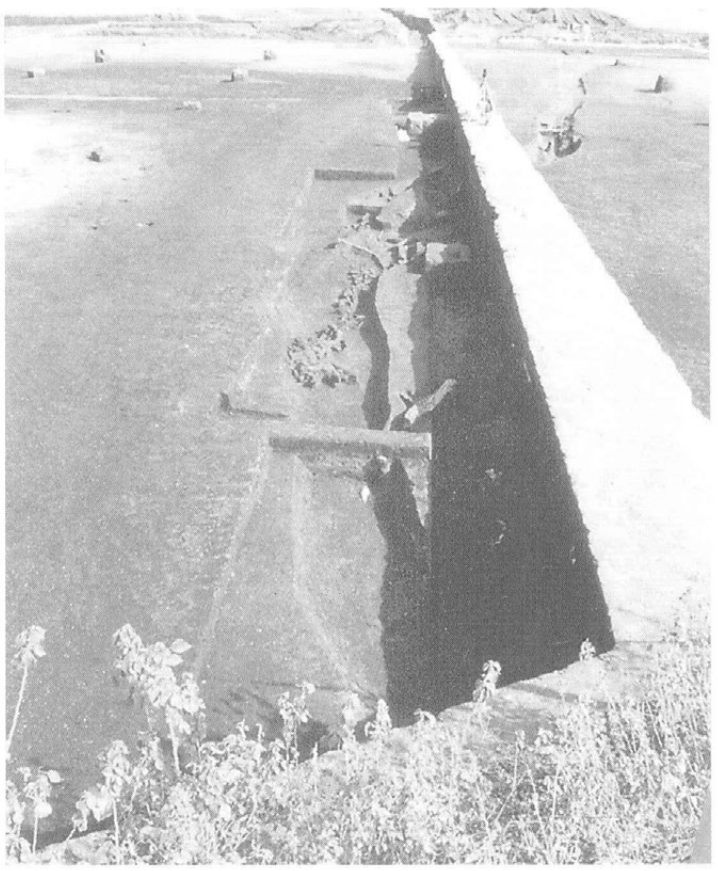


写真25．弥生後期～終末期溝状遺構（西半部）完掘状況

写真26．溝状遺構（西半部）内木製品出土状況

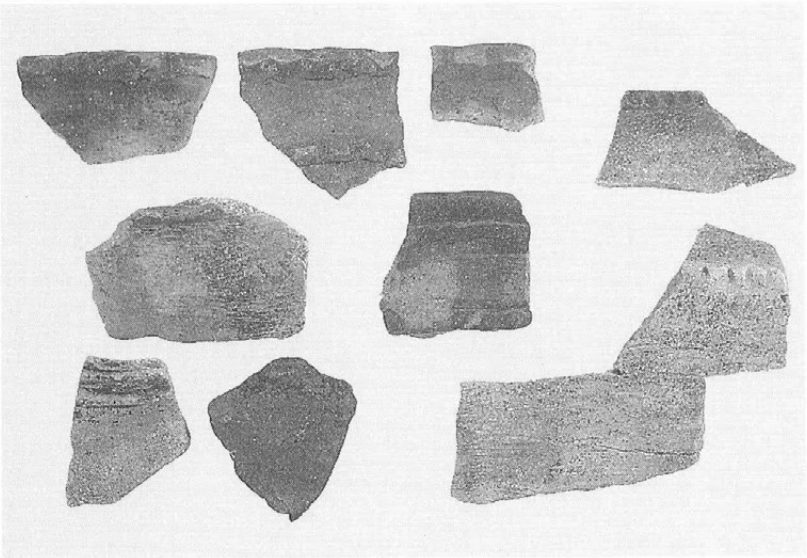


写真27．出土遺物（縄文晩期～弥生後期・終末期）①

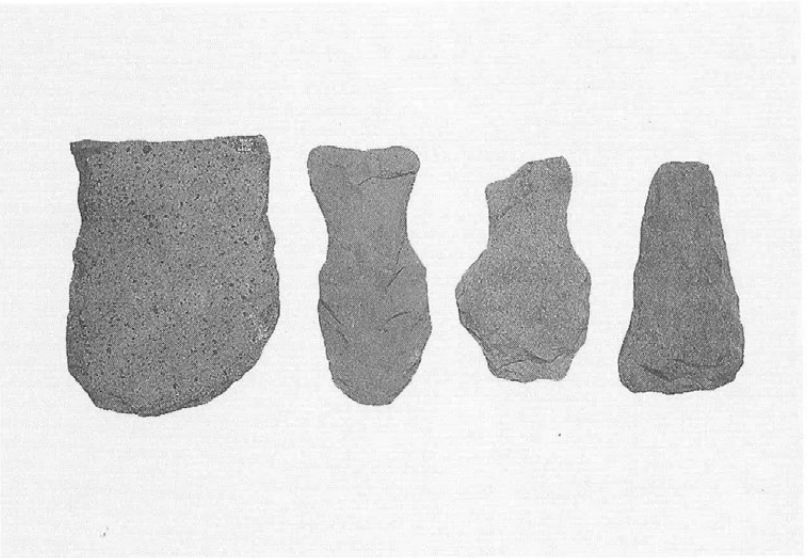


写真28．出土遺物（縄文晩期～弥生後期・終末期）②

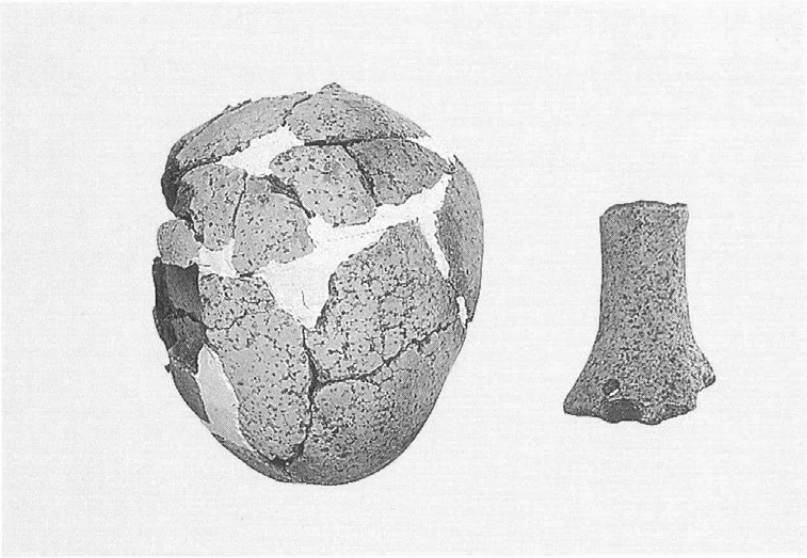


写真29．出土遺物（縄文晩期～弥生後期・終末期）③

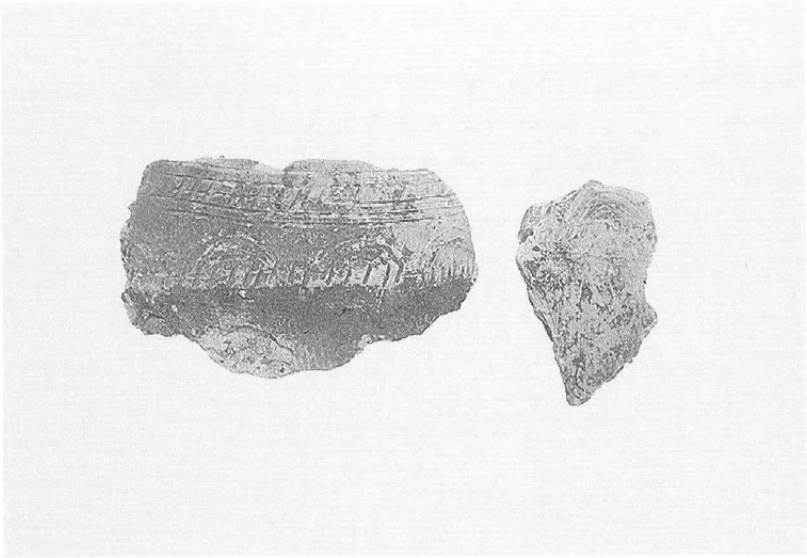


写真30．出土遺物（縄文晩期～弥生後期・終末期）④

2）古　　代　［図４・写真31～39］

古代の遺構群は、前節でのべたように概ね８世紀～10世紀の時期幅に収まると考えている。まず、掘立柱建物跡を含む柱穴群は、調査区北・西部（第１面Ａ・Ｃ区）のほぼ全域で確認されているが、３間×３間の２面庇付建物や２間×３間の総柱建物など、大型柱穴を有する建物群は調査区北側の上位段丘面縁辺に集中する傾向が認められる。棟軸が類似したこれらの建物群は、竪穴住居跡との切り合い関係から、竪穴住居群に後出すると考えられ、出土遺物の年代から９世紀後半～10世紀代を想定している。なお、今回の調査では、当該期のものとしては都城地区の初例となる柱根２点も出土している。

広範囲に分布する掘立柱建物群に比べ、竪穴住居跡はＥ－５～Ｆ－６グリッド周辺でのみ検出している。実際には、地形に沿って調査区北東部まで広がっていた可能性も高いが、今回の調査では確認できていない。また、検出した竪穴住居は切り合い関係にあるものが多いが、上位段丘面から流入したと推測される砂礫層や後世の攪乱が、その前後関係の判別を困難にしている。なお、鶴喰遺跡で多数確認された住居内のカマド遺構については、２軒の住居から検出したのみで、これも住居の建て替えや中世以降の耕作によって破壊・消失した可能性が高いと思われる。

写真31．古代柱穴群完掘状況

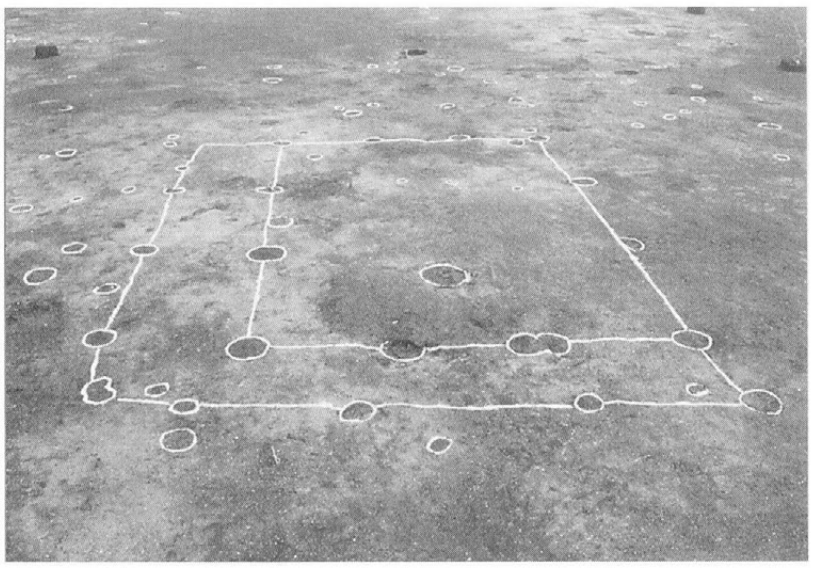


写真32．古代掘立柱建物跡検出状況

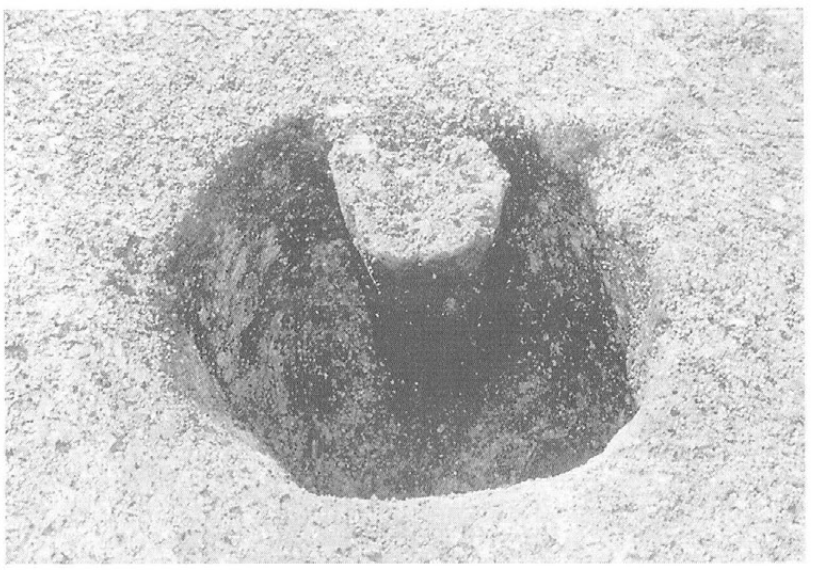


写真33．古代柱根出土状況

写真34．古代竪穴住居址群検出状況

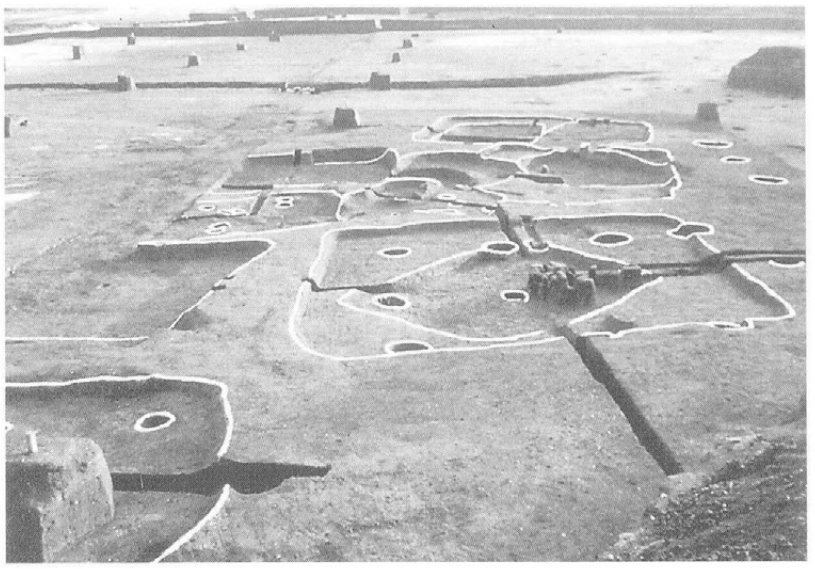


写真35．古代竪穴住居址群完掘状況

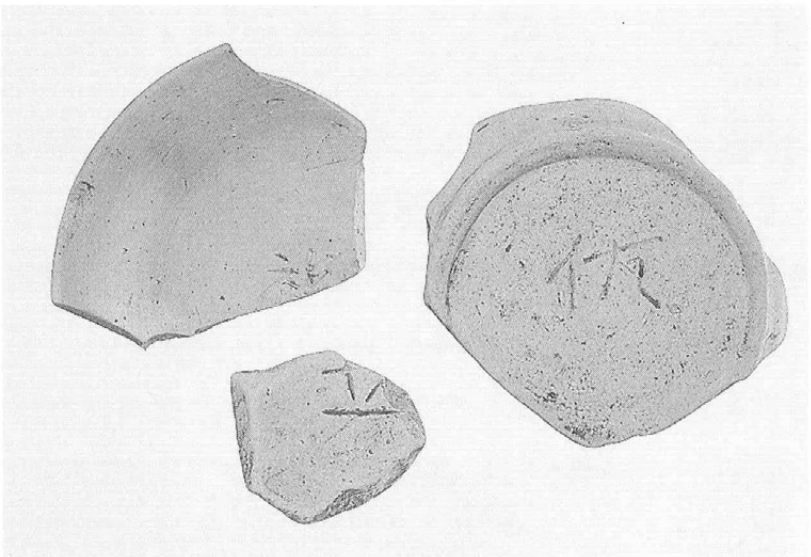


写真36．出土遺物（古代）①

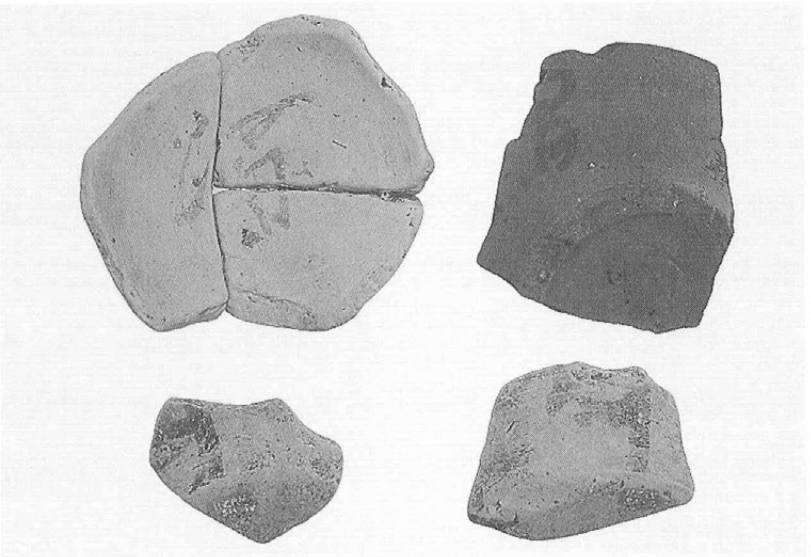


写真37．出土遺物（古代）②

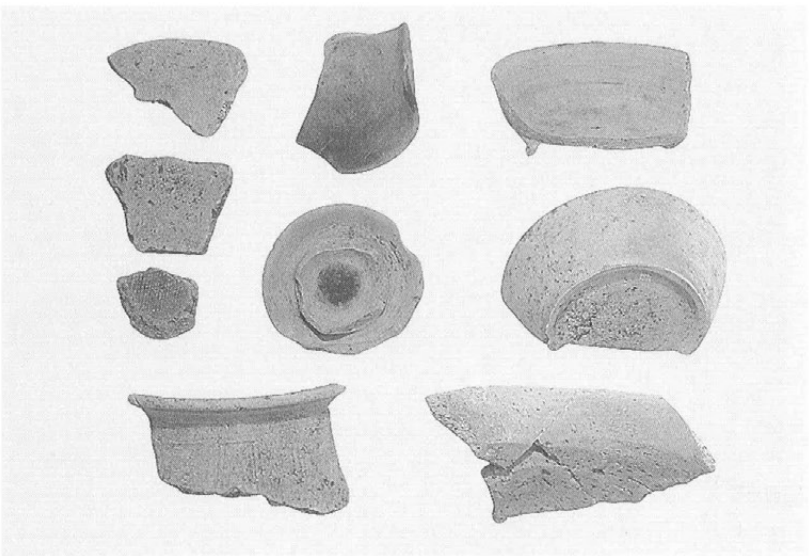


写真38．出土遺物（古代）③

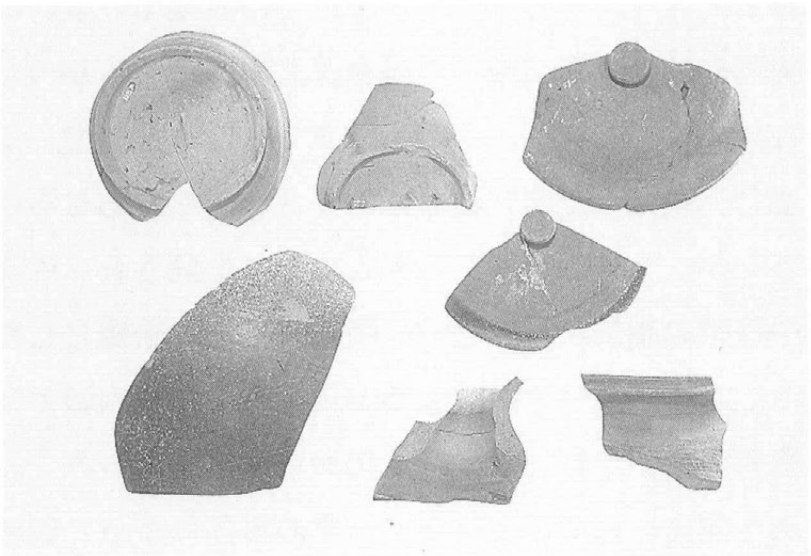


写真39．出土遺物（古代）④

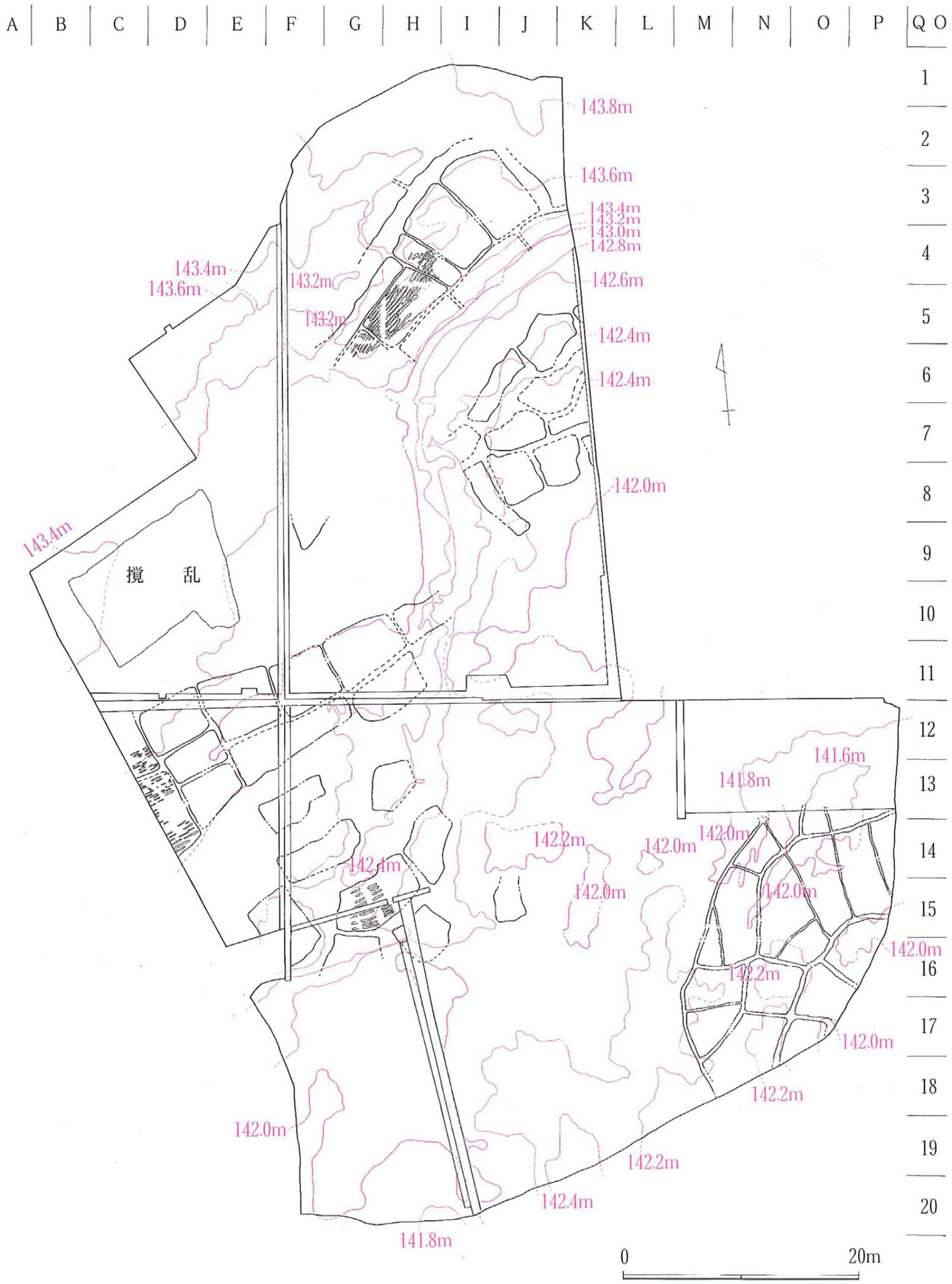


図５　肱穴遺跡遺構分布図②（中世水田分布図）

3）中　　世　［図５・写真40～62］

今回の調査で確認した当該期の遺構は、古代末～中世初頭頃（12世紀代）と中世後半（15世紀後半頃）の２時期に大別できる。検出された遺構は、いずれも水田跡や畝状遺構（畑跡）といった生産遺構のみであり、古代の段階で認められた居住施設群（掘立柱建物・竪穴住居等）が、この時期には大規模な新田開発に伴い、周辺部に移転・後退したと考えられる。まず、調査区北東部で出土した水田跡では、上位段丘の斜面部崩落によって流出したとみられる砂礫層が水田面を部分的に覆っており、砂礫が詰まって遺存した人や家畜（牛馬）の足跡を観察することができた。水田層を挟む上下の層で出土した舶載磁器から、12世紀後半頃を下限とする水田跡と考えられ、面的に捉らえられた水田としては、当地方最古の事例である。中世も後半に入ると、当遺跡のほぼ全域が水田化されていたと考えられる。これらは、文明年間（1469～1487）に降下した桜島起源の軽石層に覆われた状態で出土しており、近世以降の耕作によって攪乱は受けているものの、地形にあわせて開発された当該期水田の広がりを面的に把握することができた。また、今回の調査では、農事サイクルのどの段階（季節）に降灰したかを探る上で有用な火山灰層直下の水田面の状況に、いくつかのパターンが認められた。この種の水田遺構の初例となった鶴喰遺跡では、農耕具による天地返しの痕跡とみられる激しい凹凸がみられる水田と、ほとんど平坦で凹凸のない水田の２種類しか確認されていないが、今回はこれに加え、表面はフラットでＳ字状に続く人の足跡だけが認められる水田や、土坑状の落ち込みが列をなし、あたかも水田の中に畝が形成されたような形状のものなどが検出されている。こうしたバリエーションを、土地の性質（湿田・乾田等）に適応した農耕技術の差違と捉らえるか、いわゆるコメ作りに伴う作業工程の進捗差を反映したものと考えるか、今後民俗事例等を含めて検討していく必要があろう。なお、こうした水田とともに第１面Ｂ区西側の一部で、畝状遺構（畑跡）を確認している。これも当時の土地利用を考える上で、興味深い資料である。

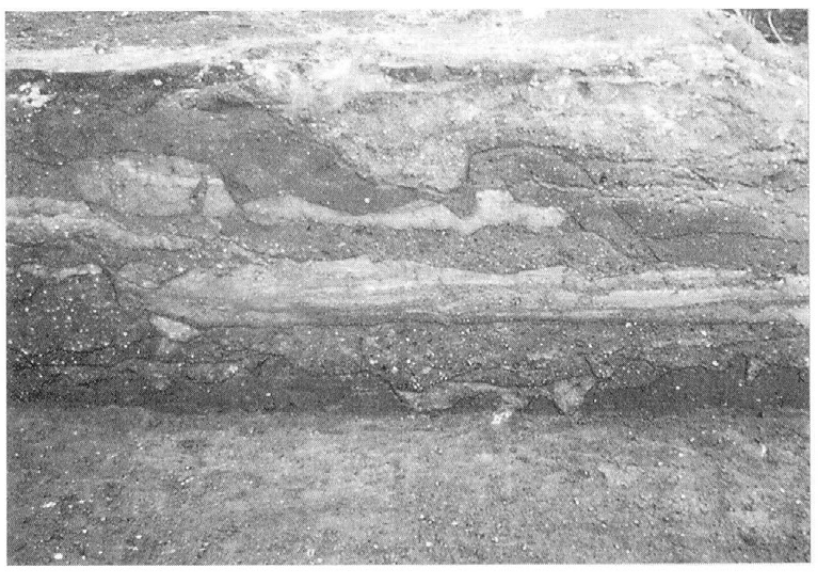


写真40．古代末～中世初頭水田層

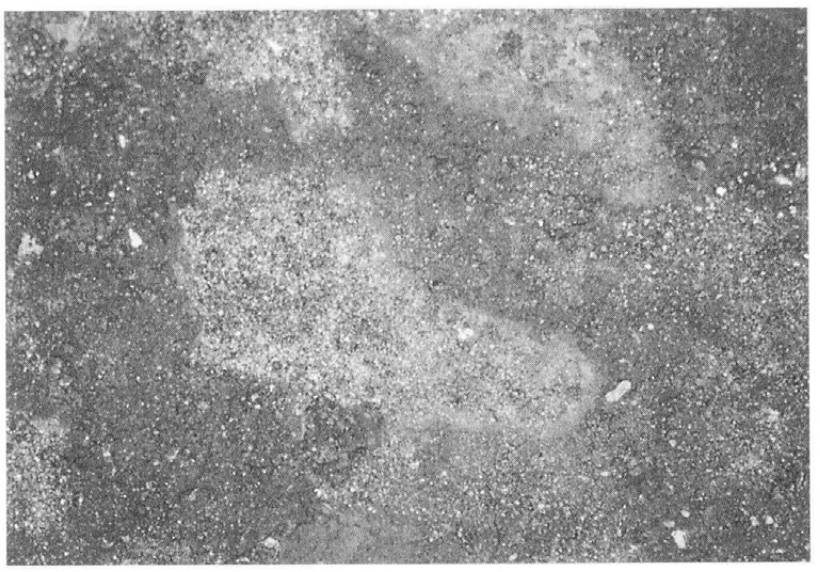


写真41．古代末～中世初頭水田面上の足跡

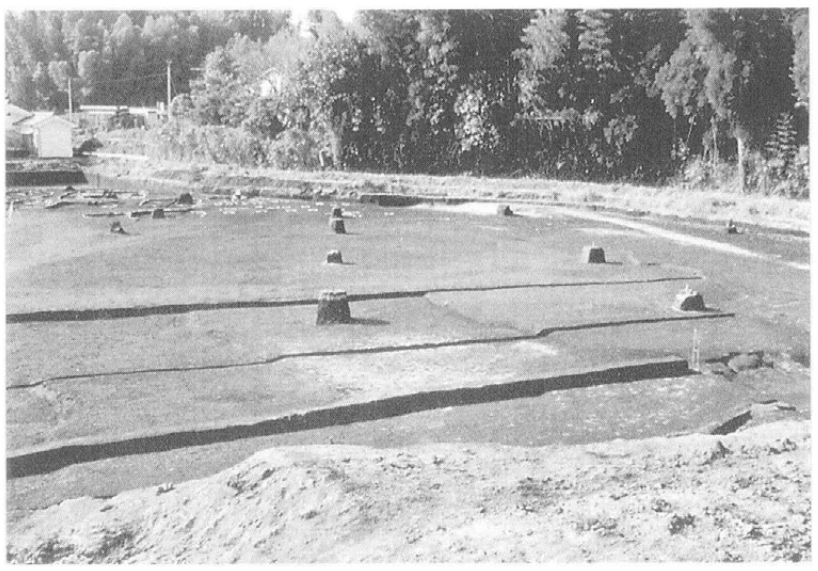


写真42．古代末～中世初頭水田面完掘状況

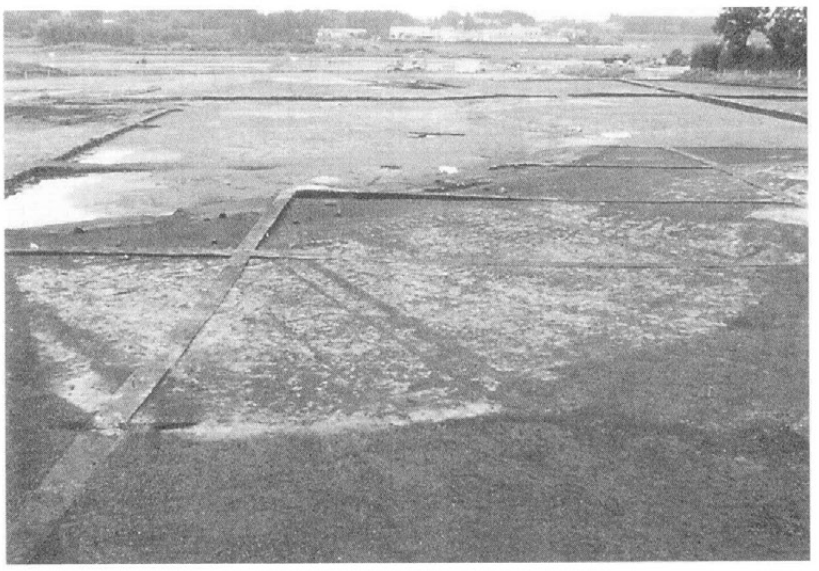


写真43．第１面Ｃブロック北側中世水田面検出状況①

写真44．第１面Ｃブロック北側中世水田面検出状況②

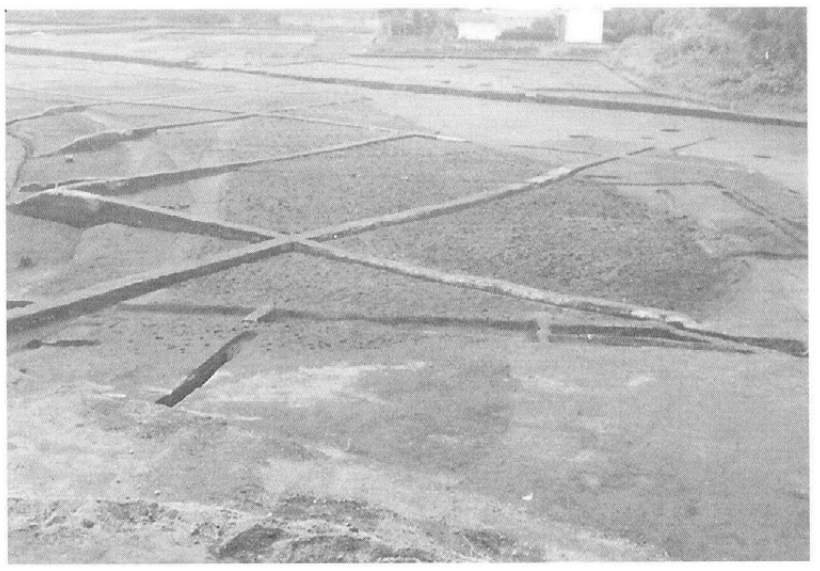


写真45．第１面Ｃブロック北側中世水田面完掘状況①

写真46．第１面Ｃブロック北側中世水田面完掘状況②

写真47．第１面Ｃブロック北側中世水田面表面状況①（凹凸面）

写真48．第１面Ｃブロック北側中世水田面表面状況②（足跡列）

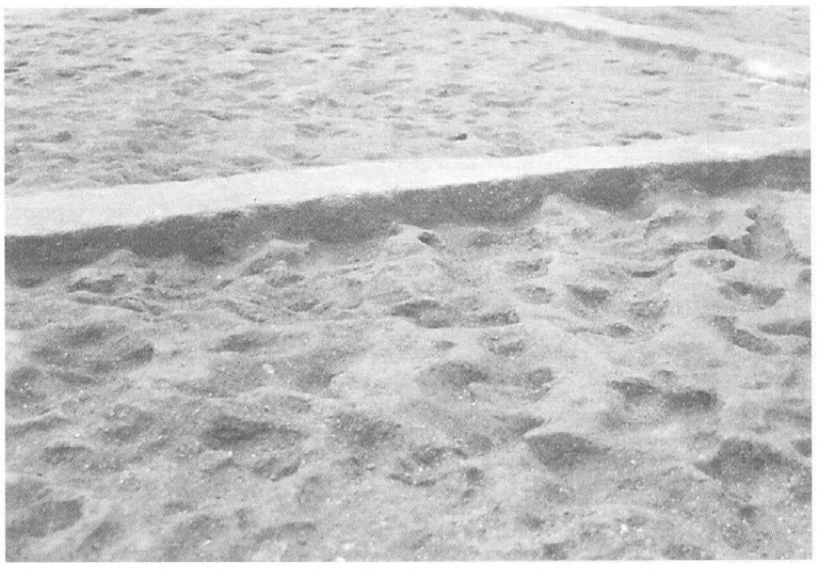


写真49．第１面Ｃブロック北側中世水田面表面状況③（畝状遺構）

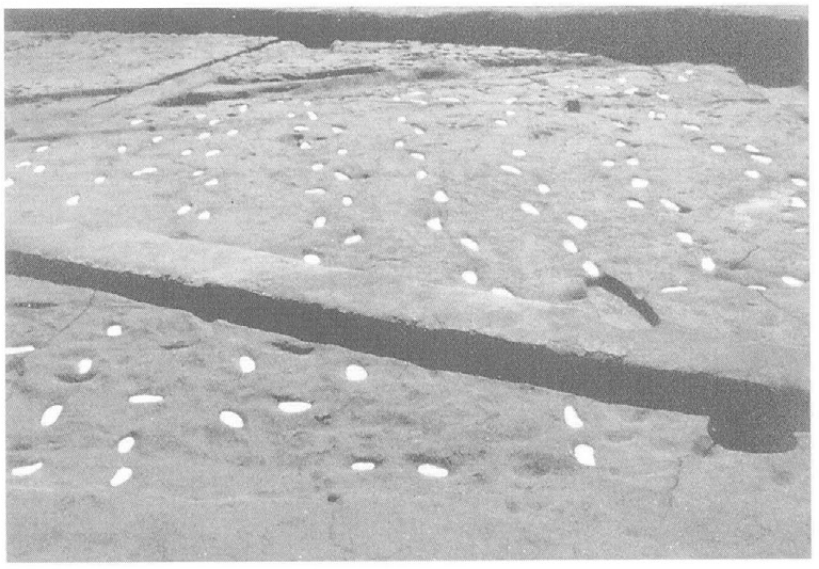


写真50．第１面Ｃブロック南側中世水田面表面状況（足跡列）

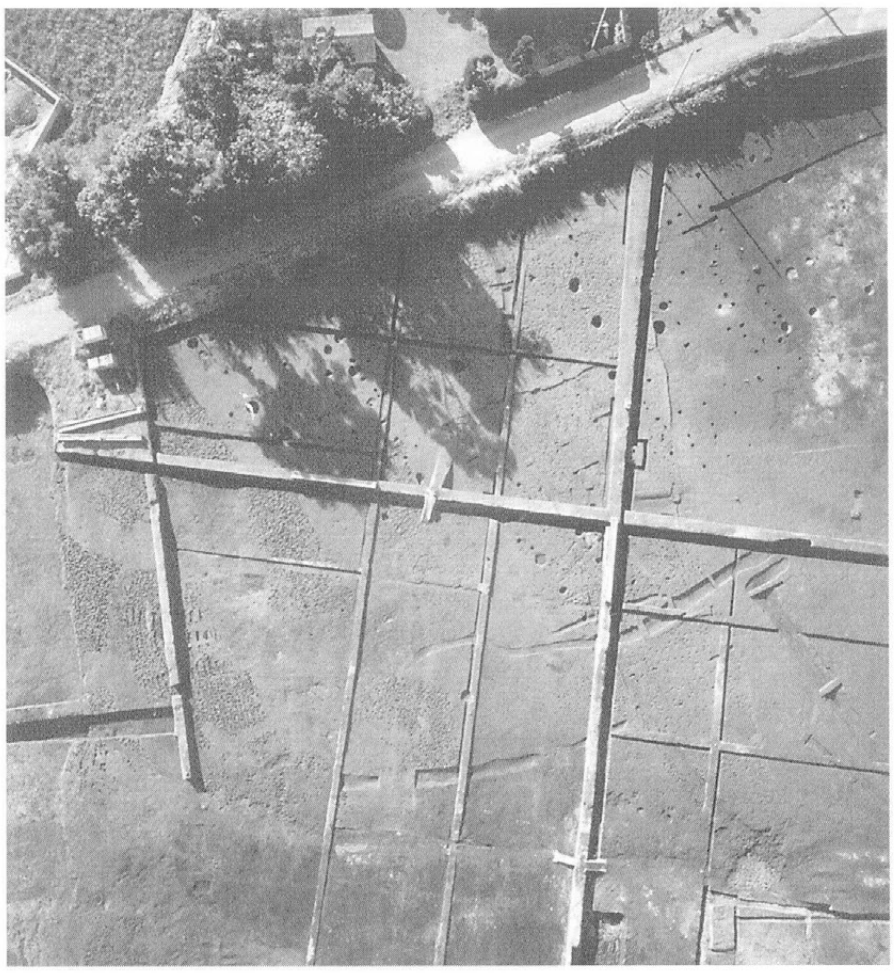


写真51．第１面Ｂ～Ｄブロック中世水田面完掘状況

写真54．第１面Ｄブロック中世畝状遺構検出状況

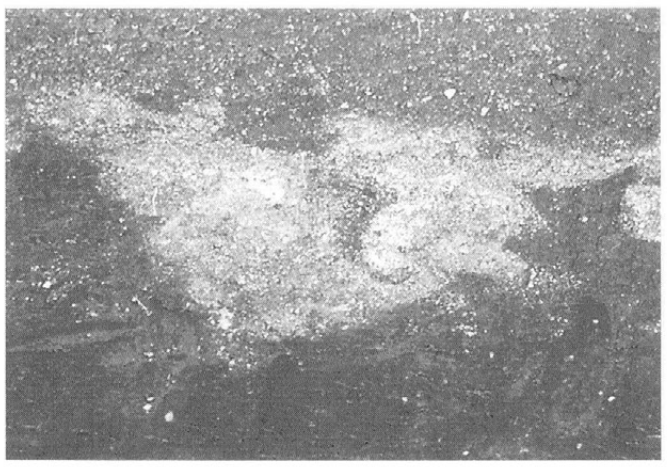


写真55．第１面Ｄブロック中世畝状遺構断面

写真52．第１面Ｂブロック中世畝状遺構検出状況

写真53．第１面Ｂブロック中世畝状遺構完掘状況

写真56．第２面Ａブロック中世水田面検出状況

写真57．第２面Ａブロック中世水田面完掘状況

写真58．第２面中世水田面完掘状況

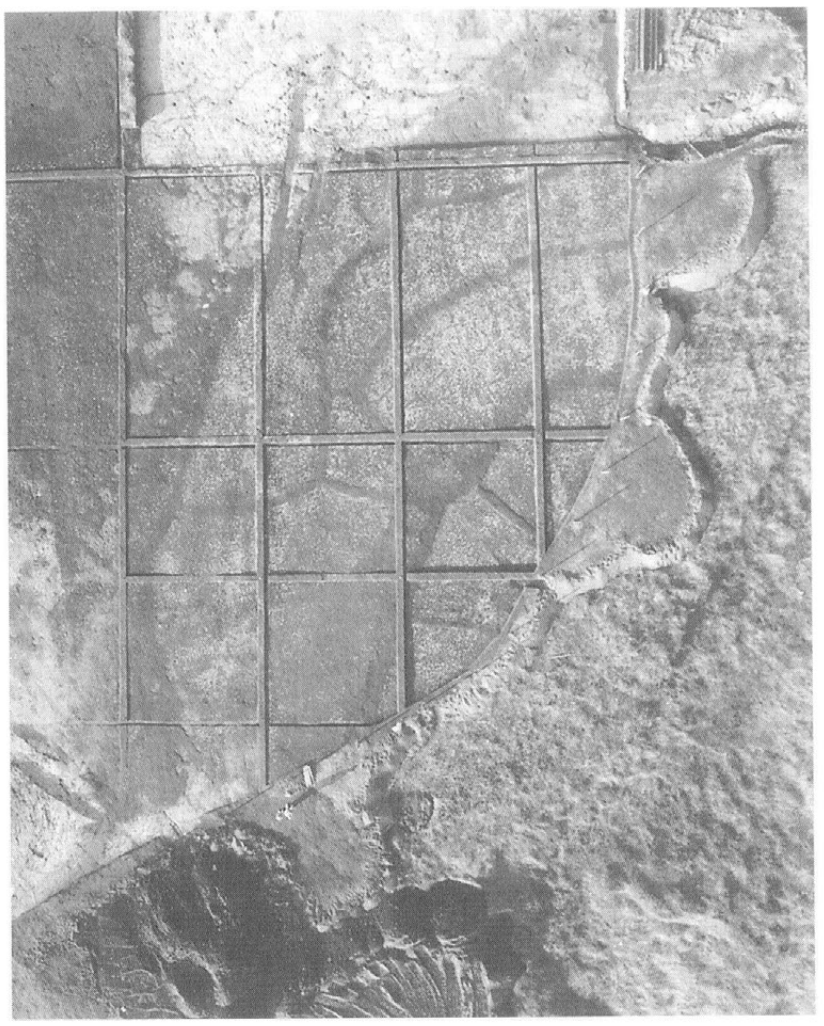


写真59．第３面南東部中世水田面検出状況①

写真60．第３面南東部中世水田面検出状況②

写真61．第３面南東部中世水田表面状況

４）近世～近代　［図６・写真63～84］

主に近世後半頃（18世紀後半～19世紀代）の遺物を伴う当該期の遺構群は、遺跡内でも一段高くなった調査区北・西側（第１面）に分布する集落遺構と、低地面である第２・３面に広がる水田遺構に分けられる。

井戸や土坑を伴い、ほぼ同じ棟軸の掘立柱建物が並ぶ居住施設群は、建物の軸と合致した溝状遺構によって区画されていたと考えられ、大きく３つの単位に分けることができる。当時の農村集落において、この単位をどの程度の農民層の居住施設と考えるか、今後市内の他の遺跡とも比較しながら検討していきたいと思う。なお、中世段階で開発した水田を廃し、再び居住施設が構築された要因について詳細は不明であるが、同じ横市川流域の久味木・加治屋地区において、正徳２年（1712）頃から約200町歩の新田開発を行

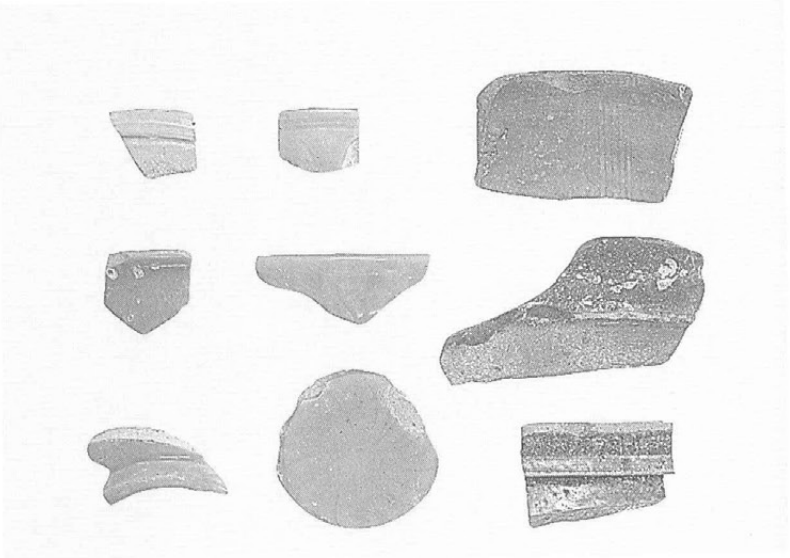


写真62．出土遺物（中世）

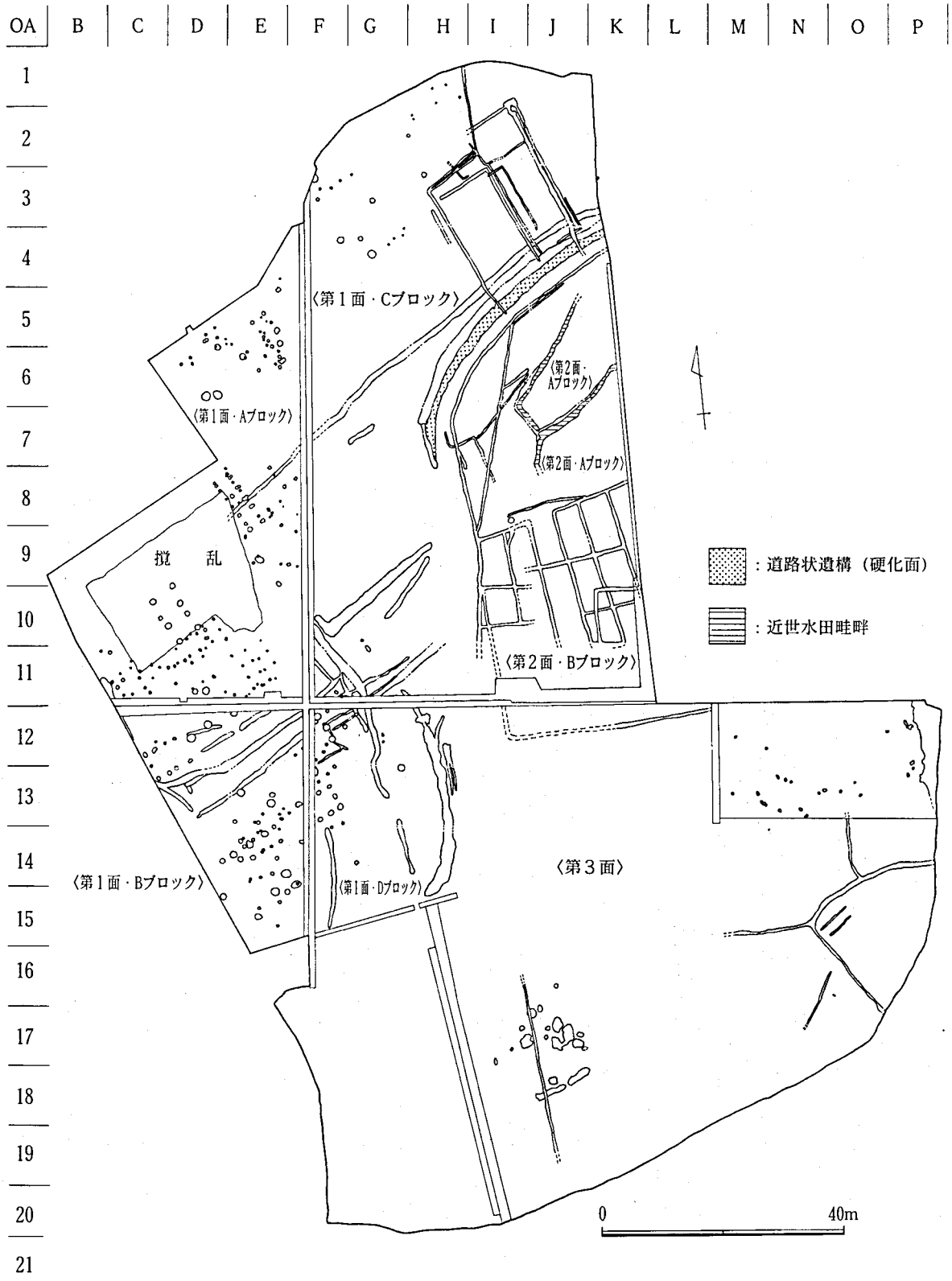


図6　肱穴遺跡遺構分布図③（近世～近代）

っていた記事が文献史料（『庄内地理志』）にみえることから、こうした新田開発に伴う農村集落の再構築により、当遺跡においても集落域が再び進出したと推察することも可能であろう。

水田については、集落遺構と同じ時期と考えられる２条の畦畔と、面的に認められる人や家畜の足跡を確認している。調査区外へ延びるため、畦畔に囲まれた水田１単位の規模は不明であるが、取水口状の遺構や畦畔に沿ってみられる溝状の落ち込みなど、近・現代へ続く当地区一帯の水田史を探る上で貴重な資料を得ることができた。また、ほぼ同じ時期の居住空間（集落跡）と生産基盤（水田）がセットで出土したことにより、朧気ながらも当時の農村風景を想像することができるという意味では、市内でも稀有な例であるといえよう。

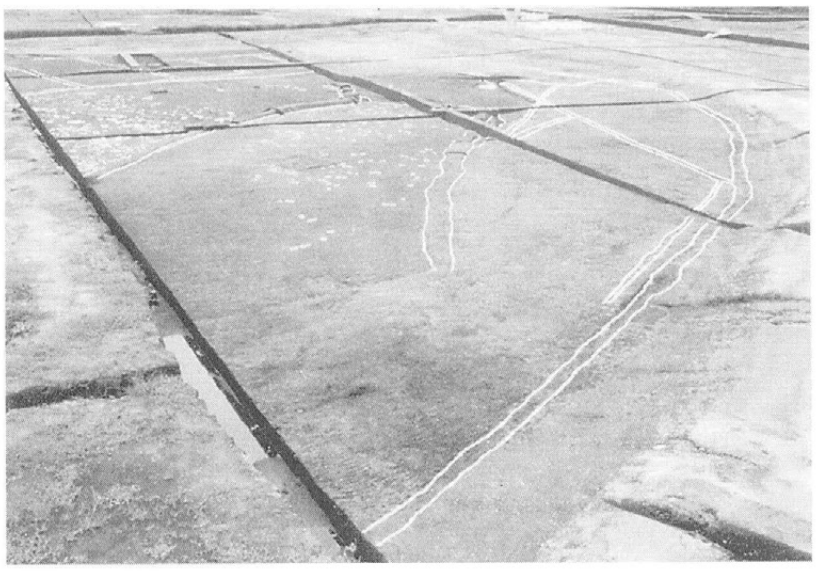


写真63．第２面Ａブロック近世水田面検出状況①

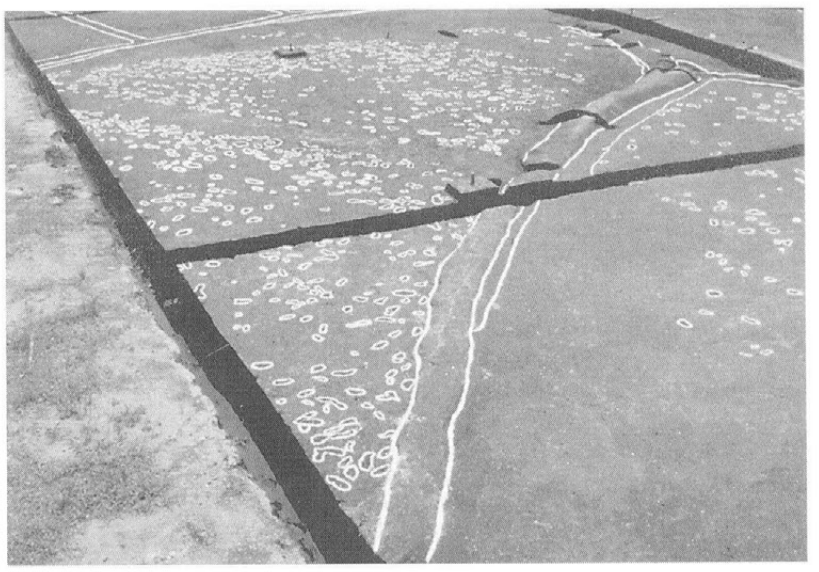


写真64．第２面Ａブロック近世水田面検出状況②

写真65．第２面近世水田面完掘状況

写真66．第２面Ａブロック近世水田面完掘状況（畦畔及び足跡群）

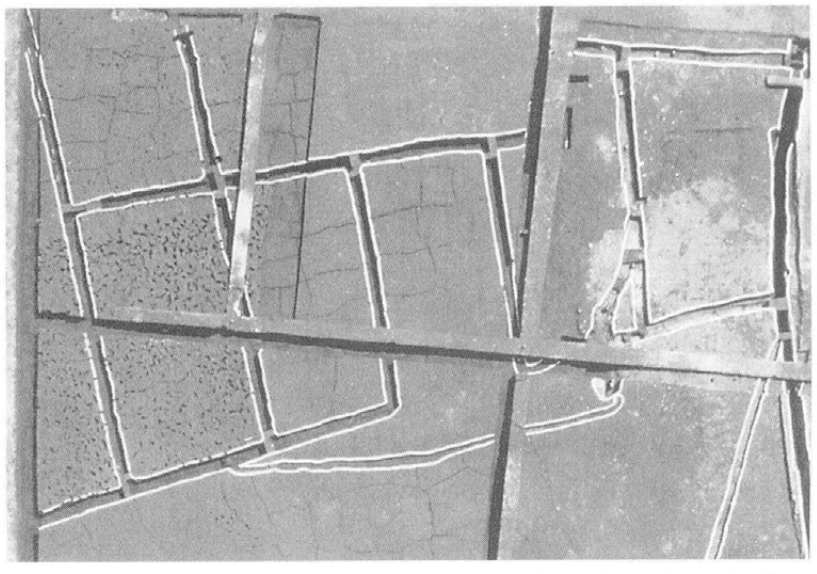


写真67．第２面Ｂブロック近世水田面完掘状況（足跡群及び水路）

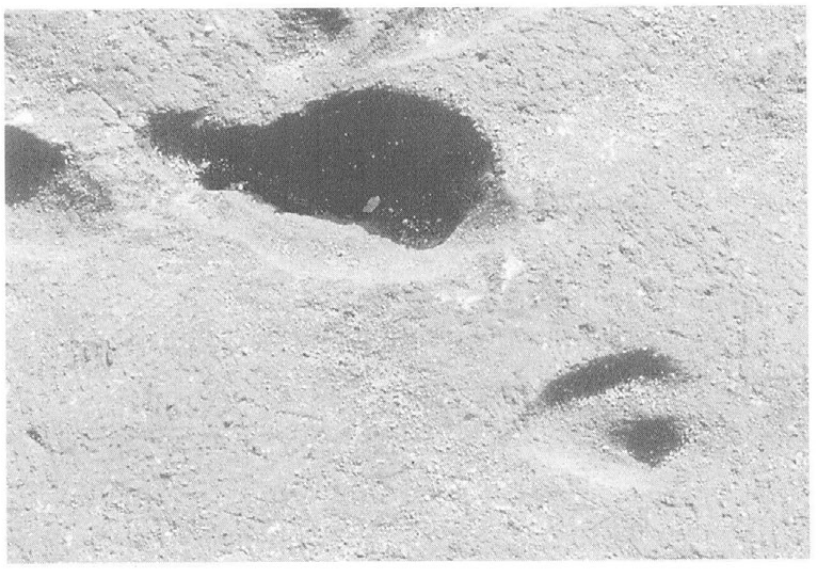


写真68．第２面Ａブロック近世水田面上凹凸（人間と家畜の足跡）

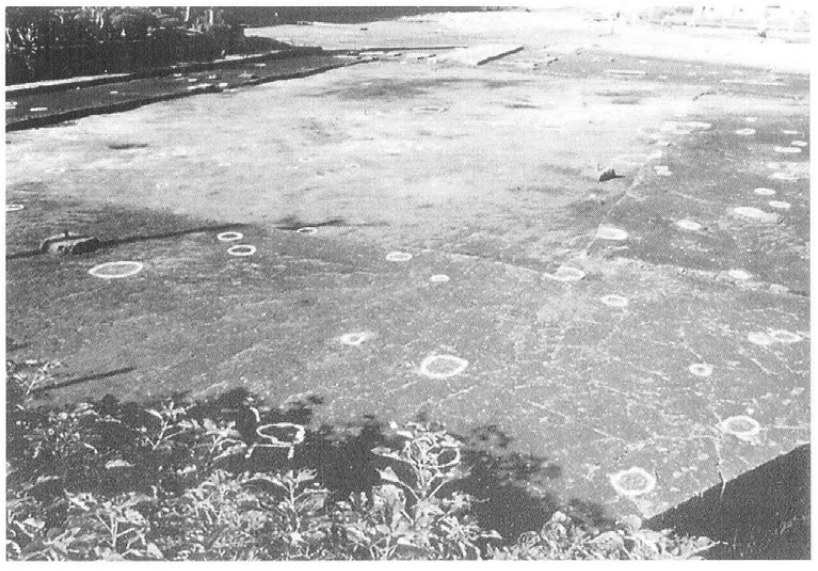


写真69．第１面Ａブロック近世遺構群検出状況

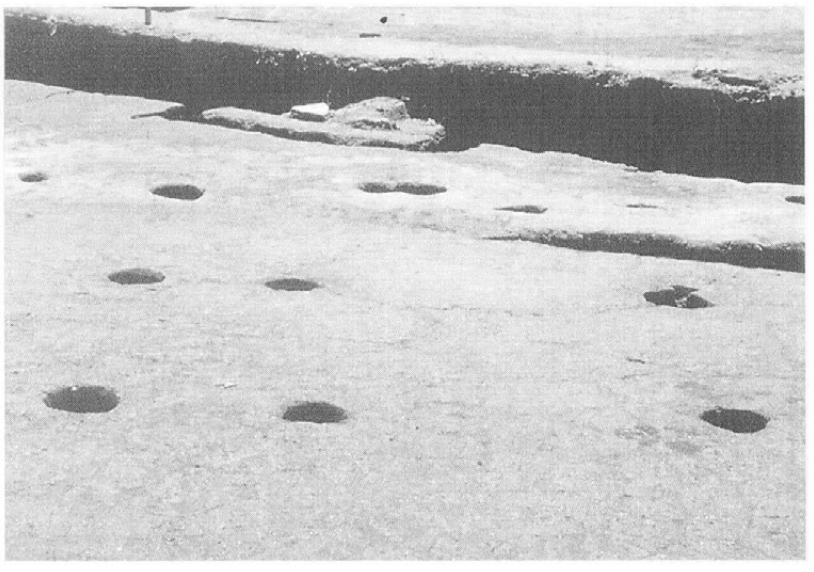


写真70．第１面Ａブロック近世掘立柱建物跡完掘状況

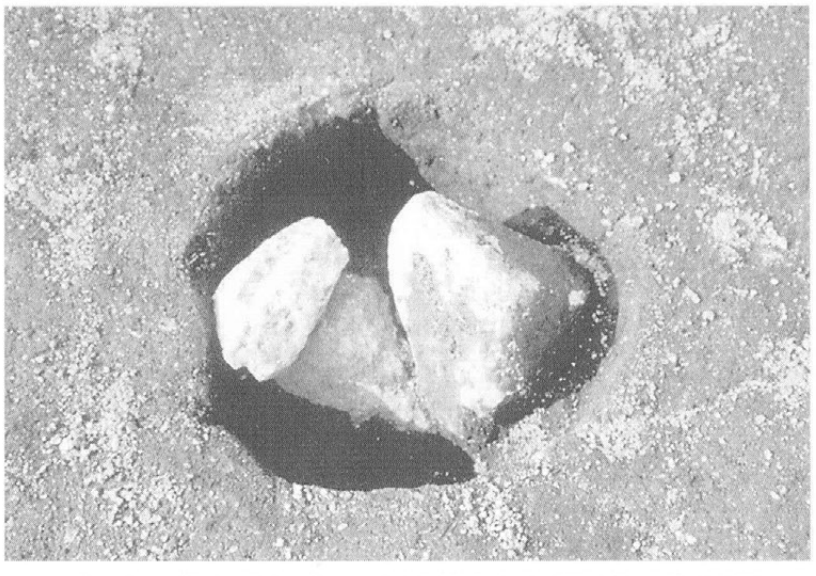


写真71．第１面Ａブロック近世柱穴内軽石礎石出土状況

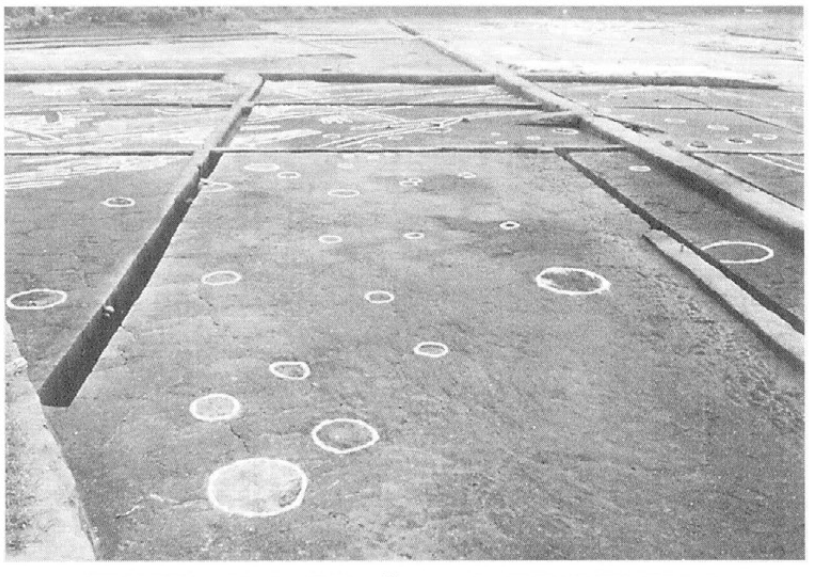


写真72．第１面Ｂブロック近世遺構群検出

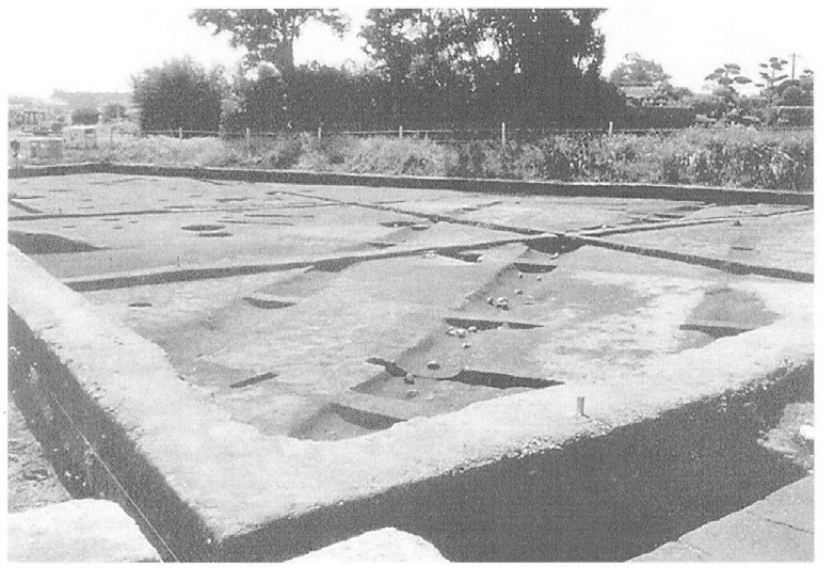


写真74．第１面Ｂブロック近世遺構群完掘状況②

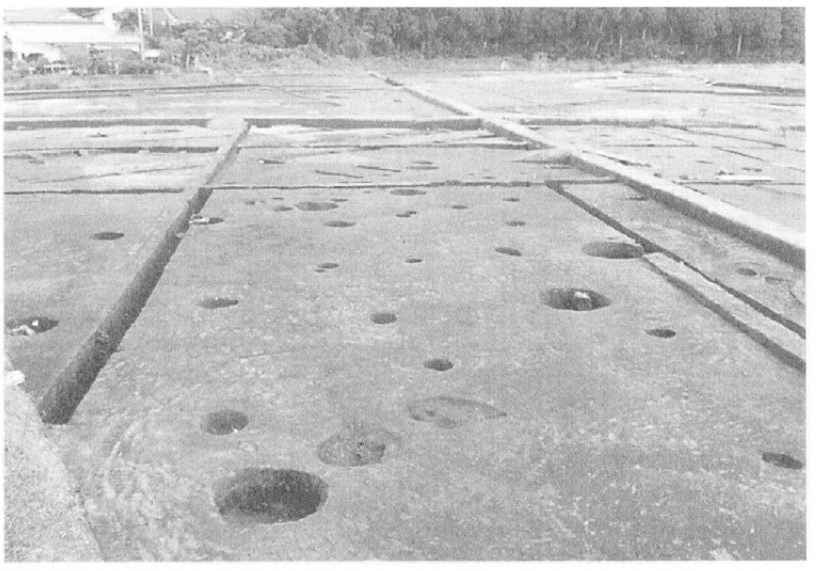


写真73．第１面Ｂブロック近世遺構群完掘状況①

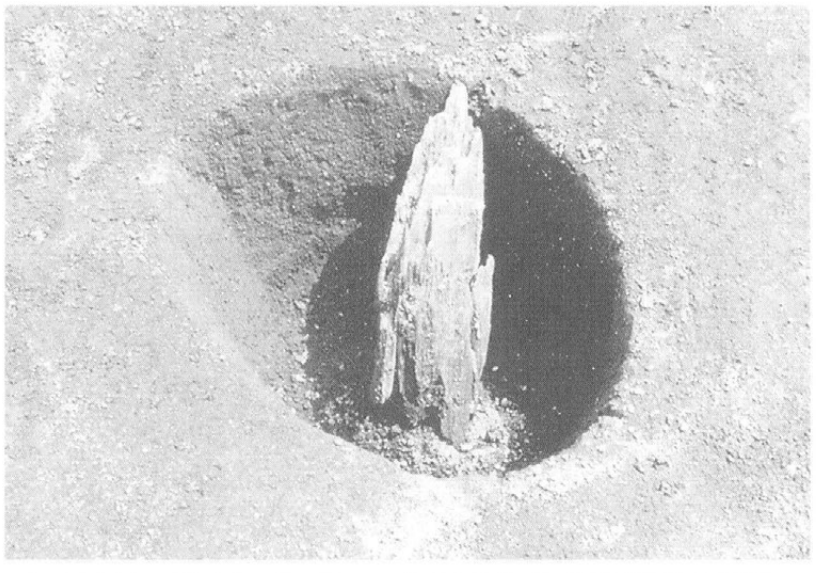


写真75．第１面Ｂブロック近世柱穴内柱根出土状況

写真76．第１面Ｂブロック近世井戸内遺物出土状況

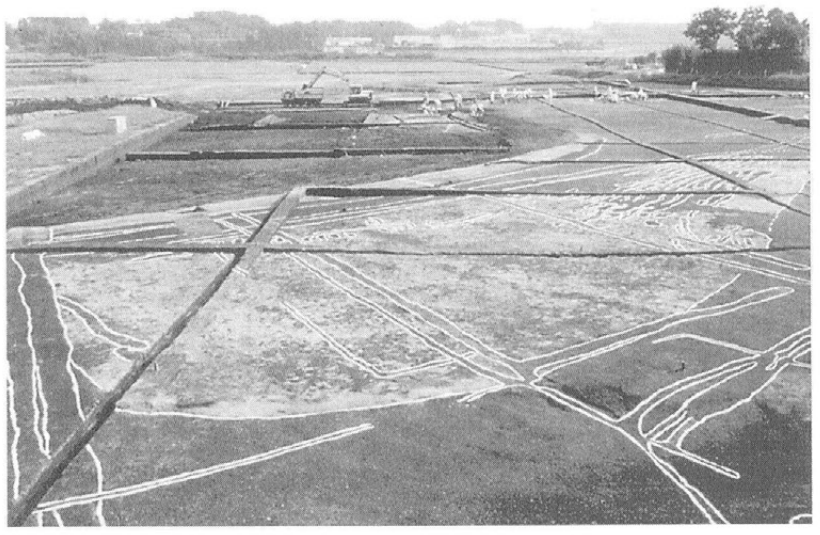


写真77．第１面Ｃブロック北側近世遺構群検出状況

写真78．第１面Ｃブロック北側近世道路状遺構完掘状況

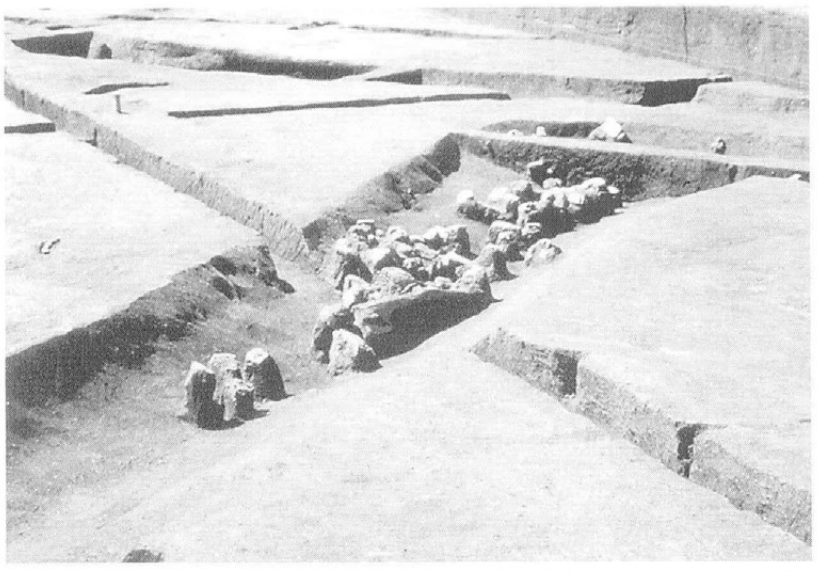


写真79．第１面Ｃブロック南側近世溝状遺構内遺物出土状況

写真80．第１面Ｄブロック近世溝状遺構完掘状況

写真81．第２面Ｂブロック近代水路遺構内竹組検出状況

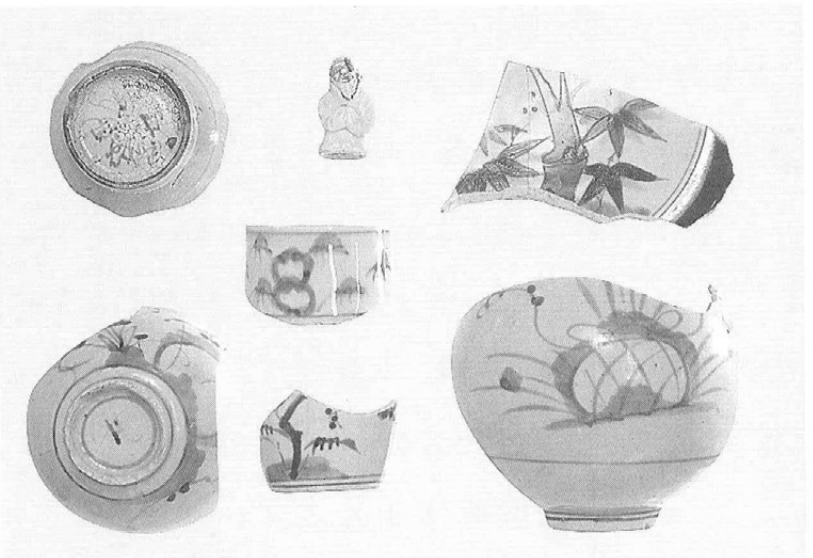


写真82．出土遺物（近世）①

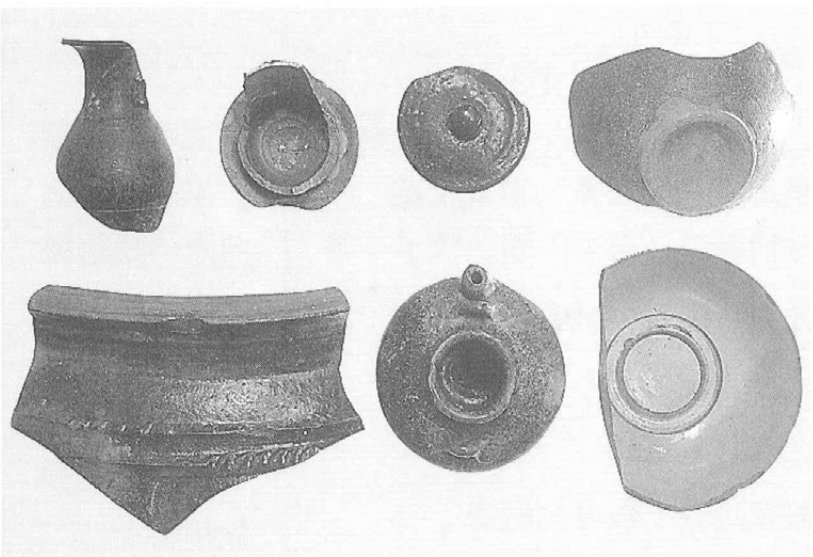


写真83．出土遺物（近世）②

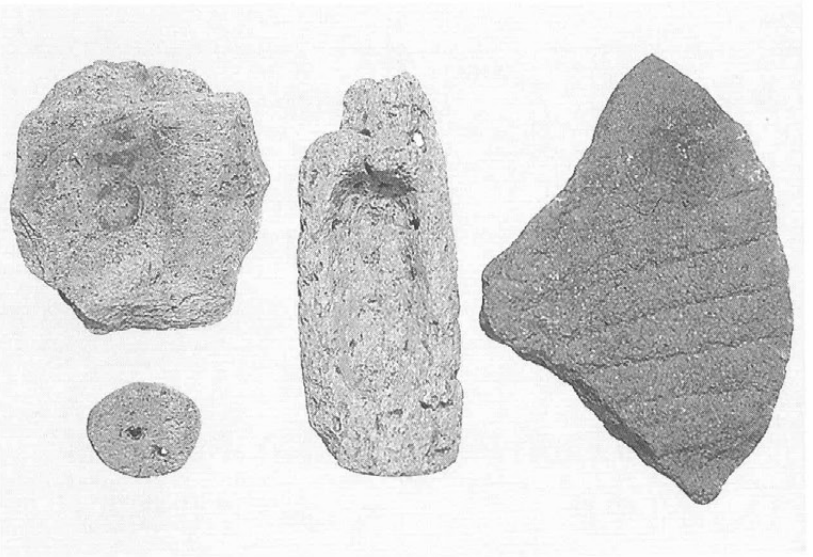


写真84．出土遺物（近世）③

フリガナ	ヒジアナ　イセキ
書名	肱穴遺跡
副書名	県営担い手育成基盤整備事業横市地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書
巻次	
シリーズ名	都城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第４７集
編集者名	横山哲英
発行機関	都城市教育委員会
所在地	宮崎県都城市姫城町６街区21号
発行年月日	1999年３月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
ヒジアナイセキ 肱穴遺跡	ミヤコノジョウシ 都城市 ヨコイチチョウアザデミズ 横市町字出水	31°44′55″ 付近	131°1′55″ 付近	1998.4.22 ～ 1998.12.15	15,000	県営ほ場整備

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	縄文（晩期）～弥生（前期）	住居跡	土器（刻目突帯文土器）・石包丁（擦切り技法）・打製土掘具	縄文時代晩期終末期～弥生前期の集落跡・水田層に共伴して、擦切り技法の石包丁や打製土掘具が出土。
	古代	竪穴住居跡・柱穴群・掘立柱建物跡	須恵器・土師器・墨書土器・緑釉陶器・布痕土器・管玉　等	
	近世	溝状遺構・道路状遺構・掘立柱建物跡・井戸	国産陶磁器・軽石製五輪塔　等	
生産遺跡	縄文(晩期)～弥生(前期)	水田層	土器（刻目突帯文土器）	
	弥生(後期～終末期)	水路跡・木組状遺構	土器（免田式）	
	中世	水田跡・畝状遺構	舶載磁器・国産陶磁器	
	近世～近代	水田跡・水路跡	国産陶磁器	

都城市文化財調査報告書第47集

肱　穴　遺　跡

1999年３月

編集　宮崎県都城市教育委員会
〒885-8555　宮崎県都城市姫城町６街区２１号
発行　TEL (0986) 23-9547　FAX (0986) 24-1989
印刷　㈲都城新生社印刷
〒885-0004　宮崎県都城市都北町7284-1
TEL (0986) 38-3500　FAX (0986) 38-4187